

佐賀市文化財調査報告書第18集

泉三本栗遺跡

昭和62年3月

佐賀市教育委員会

序

この調査報告書は農業基盤整備事業の施行にさきがけまして、県農林部委託金を受けて発掘調査を実施した、泉三本栗遺跡の調査報告書であります。

久保泉地区の発掘調査は、これまで金立山南麓の丘陵に限られておりましたが、昭和60年度より圃場整備事業が開始され、それと同時にこの平野部でも調査を始めております。

泉三本栗遺跡は弥生時代より中近世にかけて多様な遺構が検出されました。特に弥生時代・古墳時代の住居跡や平安時代の土壙墓には見るべきものがあります。

なお、調査に関しまして御指導、御協力を賜りました県教委、農林部ならびに地元の関係者各位に対しまして深く感謝申し上げます。

おわりに本書が埋蔵文化財に対する認識と古代・中世史の解明に少しでも資するものであるならば幸甚に存じます。

昭和62年 3月31日

佐賀市教育委員会

教育長 山 田 清 人

例 言

1. 本書は佐賀市教育委員会が昭和61年度に実施した泉三本栗遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は佐賀県農林部からの委託により、佐賀市教育委員会が主体となり実施した。
3. 遺構の実測、写真撮影は福田義彦が実施した。
4. 出土遺物の復元、実測、トレースなどの作業は調査員の指導のもとに佐賀市教育委員会、循環収蔵庫で行った。担当は以下のとおりである。

復元……西首金子、鬼崎玲子

実測、トレース……野中須矢、浜田糸子、香田哲子

5. 本書の執筆の作成は福田が行なった。

凡 例

1. 遺構についてはほぼ検出順に通し番号を付し、その前にSB(住居跡、掘立建物跡)、SK(土壇)、SD(溝)、SE(井戸)、SP(土墳墓)の分類記号を付した。
2. 遺構の法量はm単位、遺物の法量はcm単位を原則として用いた。
3. 遺構実測図および本文中の北方位はすべて座標北である。
4. 遺物実測図の中心線が一点鎖線となっているのは反転復元を表わす。

本文目次

I. 序	説	1
1. 調査に至る経過		1
2. 調査の組織		1
II. 位置と環境		1
1. 地理的環境		1
2. 歴史的環境		1
3. 遺跡の概要		3
III. 遺構		4
1. 住居跡		4
2. 掘立柱建物跡		8
3. 土壇		9
4. 井戸		12
5. 土壇墓		13
6. 溝		13
IV. 遺物		13
V. まとめ		23

挿図目次

Fig. 1	泉三本栗遺跡周辺遺跡分布図	2
2	遺跡周辺見取図	3
3	SB002住居跡実測図	4
4	SB010住居跡実測図	4
5	SB014住居跡実測図	5
6	SB015住居跡実測図	5
7	SB001住居跡実測図	5
8	SB003住居跡実測図	6
9	SB004住居跡実測図	7
10	SB005竪穴遺構実測図	7
11	SB006竪穴遺構実測図	8
12	SB001掘立建物跡実測図	8
13	SB002掘立建物跡実測図	9
14	SB003掘立建物跡実測図	9
15	SK001土壇実測図	9

Fig. 16	SK006土壙実測図	10
17	SK016土壙実測図	10
18	SK003土壙実測図	10
19	SK005土壙実測図	11
20	SK008土壙実測図	11
21	SK009土壙実測図	12
22	SK011土壙実測図	12
23	SE001井戸実測図	12
24	SE002井戸実測図	12
25	SP001土壙墓実測図	13
26	SK006・061、SB015出土遺物実測図	15
27	SB001住居跡出土土器実測図	16
28	SB003住居跡出土土器実測図	17
29	SB004住居跡出土土器実測図	18
30	SB005竪穴遺構出土土器実測図	19
31	SB006竪穴遺構出土土器実測図	19
32	SE001・002井戸出土土器実測図	20
33	SK009・011土壙、SD001・007溝出土土器実測図	21
34	SP001土壙墓出土遺物実測図	21
35	A-I区遺構配置図	24
36	A-I区遺構配置図	25
37	B-I・II区遺構配置図	25

図 版 目 次

PL. 1	A-I-II区全景、A-I区全景、A-IV区全景	PL. 4	SK001土壙、SK003土壙
2	SB002住居跡、BK010住居跡		SK006土壙、SK012・017土壙
	SB014住居跡、SB015住居跡		SK018土壙、SK005土壙
	SB001住居跡、SB003住居跡		SK008土壙、SK009土壙
	SB004住居跡、SB005竪穴遺構		SK011土壙
3	SB006竪穴遺構、SB016竪穴遺跡	5	SP001土壙墓
	SB003住居跡土器出土状況	6	B-I区全景、B-II区全景
	SB004住居跡土器出土状況		B-II区中央部（北から）
	SB001建物跡、SB002・3建物跡		SD001～4溝断面、発掘作業風景
	SE001井戸、SE002井戸	7～10	泉三本栗遺跡出土遺物写真

I. 序 説

1. 調査に至る経過

昭和61年度の県営圃場整備事業は久保泉東部地区で12ヘクタールが計画された。これに伴い昭和60年度秋に当該地区の埋蔵文化財確認調査を実施した。その結果、昭和61年度工区で約5,000平方メートルが遺跡であることが判明した。この調査結果を基礎に、県農林部、県教委、佐賀市土地改良課、佐賀市教育委員会の四者で埋蔵文化財保護に関する協議を重ねた結果、削平を受ける圃場部分と水路予定地点について発掘調査を実施し記録保存とすることになった。

調査は東側の丘陵をB地区、西側の丘陵をA地区とし、昭和61年7月下旬より開始し、同年9月末日をもって終了した。

調査後の遺物復元・実測・写真撮影は循誘収蔵庫で実施した。

2. 調査の組織

担 当 佐賀市教育委員会
事 務 局 佐賀市教育委員会 社会教育課
課 長 中村 弘
課長補佐 北原 学
課長補佐 江川 光男
事務吏員 本告 敬資（庶務担当）
〃 福田 義彦（調査担当）

発掘作業員 村川キクエ、原瀬八重子、広瀬 幸子、橋本 絹子、生田美代子、大野道江
原 ミチエ、宮地 峯子、富永ツヤ子、角田千代乃、中村 均

協 力 佐賀県農林部、佐賀県教育委員会、佐賀県立博物館、佐賀市土地改良課
久保泉地区土地改良区、山豊建設株式会社、新九州測量株式会社
空中写真 稲富

II. 位置と環境

1. 地理的環境

泉三本栗遺跡は佐賀市久保泉町大字下和泉字三本栗にあつて、脊振山南麓部より南に広がる複合扇状地上に立地する。久保泉町は佐賀市の北東部にあり神埼町と接する田園地帯であり、広大な圃場が広がっている。下和泉地区の農地のほとんどが水田であるが、その中にある畑地で水田との比高約1mの低丘陵が点在する。当遺跡はこのような低丘陵に立地しており、上和泉地区ではその規模も大きいほうである。

2. 歴史的環境

周辺は佐賀県遺跡地図^{註1}で見ると、大半が埋蔵文化財包蔵地であり、採集できる遺物は弥生期～近世に至るものである。しかし、実際に調査された遺跡となれば非常に少ない。調査された



～近世に至るものである。しかし、実際に調査された遺跡となれば非常に少ない。調査されたものとしては北西1キロメートルに弥生時代の集落跡である琵琶原遺跡^{註2}、北方約3～4キロメートルに古墳時代の丸山遺跡^{註3}、西原遺跡^{註4}、鈴熊遺跡^{註5}、関行丸古墳^{註6}、帯隈山神籠石^{註7}などが知られている。この外、昭和30～40年代にかけての応急的な調査ではあるが、櫟木遺跡^{註8}、白石原遺跡^{註9}などが知られている。また、昭和59年度に、県道佐賀脊振線西側の上和泉地区において約50ヘクタールの工場団地予定地の埋蔵文化財確認調査を実施したが、その中に包括されている徳永遺跡^{註10}や篠木野遺跡^{註10}の輪郭がわかってきた。工場団地予定地内の遺跡の在り方は少なくとも当遺跡北方の県道小城・北茂安線付近までは地形から判断すると同様なものと考えられる。

註1. 佐賀県教育委員会『佐賀県遺跡地図』昭和55年

註2. 福田義彦『琵琶原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第13集 昭和56年

註3. 東中川忠美他『久保泉丸山遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(5)

註4. 田平徳永他『西原遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(3)

註5. 蒲原弘行他 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報 第4集

註6. 渡辺正気『関行丸古墳』佐賀県文化財調査報告書第七輯 昭和33年

註7. 鏡山 猛他『帯隈山神籠石とその周辺』佐賀市文化財調査報告書 昭和42年3月

註8. 昭和30年に佐賀県教委が応急的な調査を実施している。

註9. 福田義彦『久保泉工場団地内遺跡』佐賀市文化財
調査報告書 昭和60年

註10. 戦時中の開墾の際、集落北端の松林で甕棺が出土している。

3. 遺跡の概要

A地区、B地区より多種多様の遺構を検出した。概してA地区は弥生時代・古墳時代・中世の遺構、B地区は中世から近世の遺構が集中している。

A地区で遺構が多く検出された地点を概観すれば、やはり標高が高く、当丘陵における「背」にあたる部分と見ることができる。丘陵の基盤は西南部が低くなっており、遺構も小穴が疎らにある程度で住居、土壌等は存在しない。

B地区の所在する丘陵は北東隅が基盤は最も高く、そこから西、西南方向へ傾斜している。A・B地区合わせて検出した遺構は次のようなものがある。弥生期のものとして住居跡4軒、土壌6基、古墳時代のものとして住居跡3軒、竪穴遺構2基、掘立柱建物跡3棟、井戸2基、中世のものとして土壌5基、溝7条を検出した。

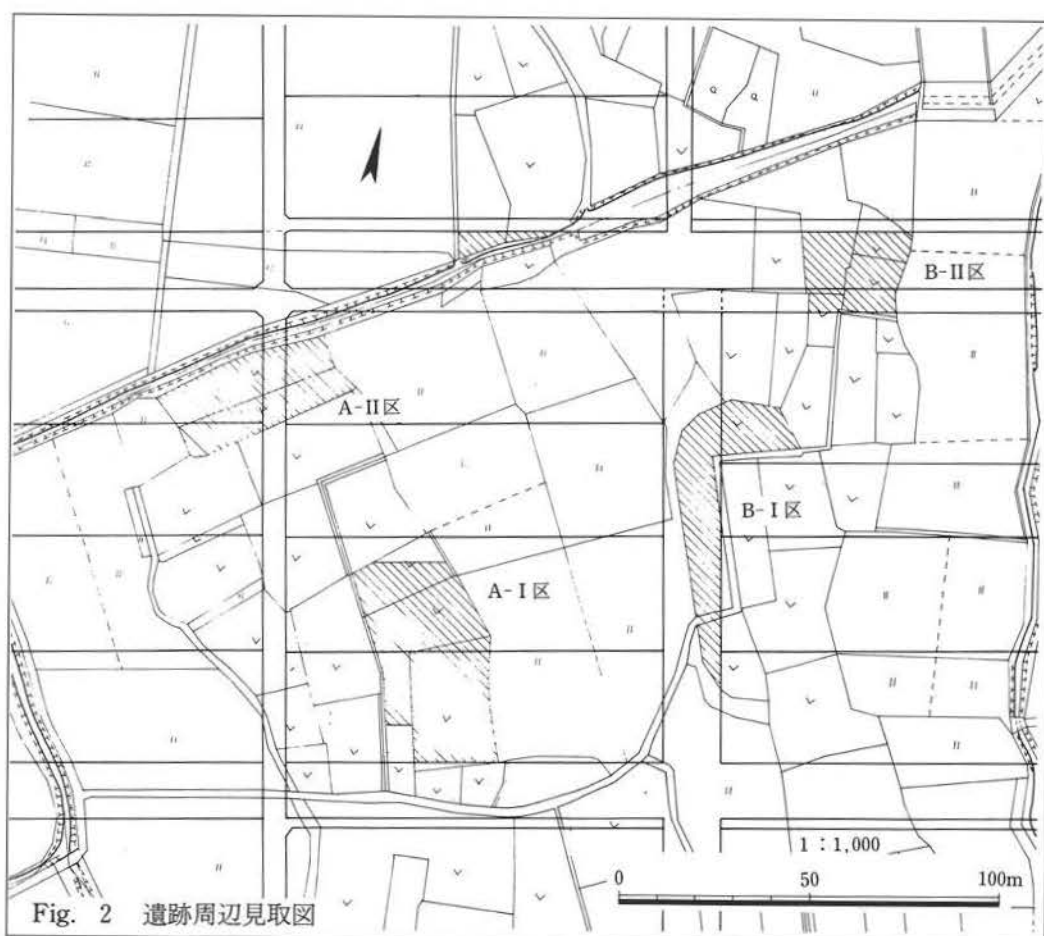


Fig. 2 遺跡周辺見取図

III. 遺 構

1. 住 居 跡

A地区で弥生時代前期・中期、古墳時代中期のものを合計7基検出した。SB010・014・015については径が小さく、壁の立ち上り方もSB002と比すると様相を異にするので土壇(又は貯蔵穴)との見方もできるが、佐賀市金立町の大門西遺跡で同時期、同規模のものが検出されているので住居として扱った。またSB005・006は古墳時代の竪穴遺構として取扱ったが、この欄で詳細を記す。

SB002住居跡

A-I区SB001住居跡の北約5mに位置する。上面の平面形は円形で径4mを測る。壁は残存状況があまり良好でなく、高さ0.1m程度で、床面はゆるやかな起伏がある。柱穴は4個検出し、概ね径0.25m、深さ0.4mの小穴で、柱穴間の距離は、a・c間1.8m、b・d間1.7mを測る。床面中央部に不定形の浅い落込みが検出されたが、炉址と考えられる。また西壁寄りに小穴を検出した。当遺構に伴うものとするが用途は不明。側溝は全く検出しなかった。

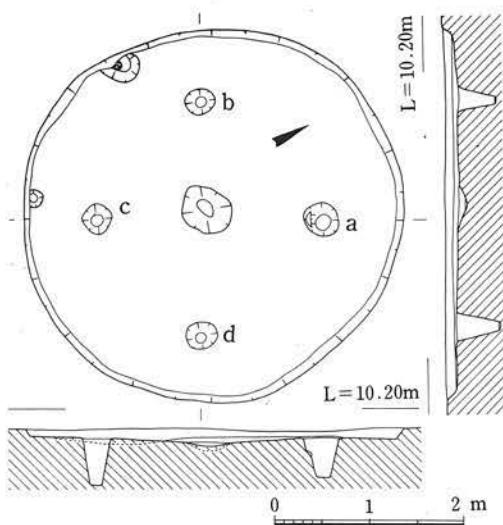


Fig. 3 SB002住居跡実測図 (S=1/80)

埋土は黒褐色土、淡黒褐色土の2層に大別される。遺物については埋土中より土器細片を検出したが器種は不明である。

SB010住居跡

A-II区中央部にあり、SK009、SB006が近接する。上面の平面形は楕円形を基調とするもので、東西3.32m、南北3.73m、深さ0.15m程度を測る。床面は緩やかな起伏があり、5箇所に小穴を配する。内1箇所は中央部にあり、東西0.42m、南北0.33m、深さ0.05m程度を測り、位置関係から見て炉址か。北東部と北西部に径0.3m程度の小穴があるが柱穴とは認めがたい。全体的に見て形状はいびつであり、SB014・015とは違った様相があるので住居跡ではなく土壇の可能性もある。

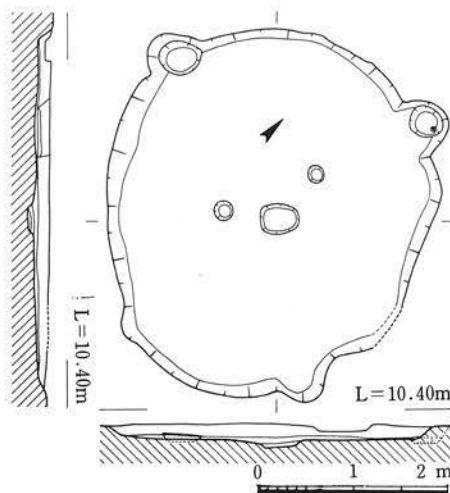


Fig. 4 SB010住居跡実測図 (S=1/80)

SB014住居跡

A-II区北西隅に位置し、SB015住居跡と近接している。北西隅をクリークに切られているが、上面の平面形は円形を基調としたものである。中心部で径3.5～3.6m、深さ2.5mを測る。床面はほぼ平坦であるが、小穴や溝状の掘込みがある。このうち西半部の溝状のものはこの遺構以前のものとする。炉址は検出できず、柱穴も壁際にある小穴にはむすびつけ難い。

埋土は淡褐色土が主体となっており、遺物はその中から小量検出した。埋土中に焼土、カーボン等は確認できなかった。

SB015住居跡

A-II区北西端に位置しSB010・014住居跡などと隣接する。上面の平面形は円形を基調としたもので径約3.5m、深さ0.57mを測る。床面はほぼ平坦で中央東寄りに小穴が2箇所にある。炉址・柱穴は検出できなかった。東南壁から北西壁にかけて稜を有するが、掘込み面の欠落、後退によってできたものとする。床面積約9.6平方メートル、床面標高9.6m。

埋土は淡褐色土を主体としたものである。埋土中より土器片を少量検出したが図化できるのは比較的床面に近いものだけである。

遺物は主として埋土下層及び床面直上で検出し、器種としては甕形土器、壺形土器などがある。

SB001住居跡

A-I区北部、SB002住居跡の南約4mに位置する。上面の平面形は長方形を基調としているが、南壁が北壁に比してやや長く、台形がかっている。中央部で東西3.95m、南北3.84m、現存壁高0.23m、面積15.2平方メートルの規模を有す

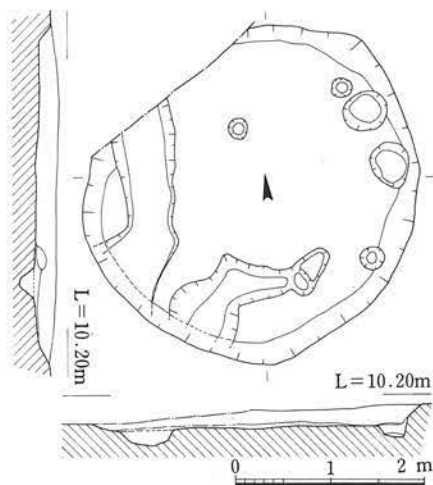


Fig. 5 SB014住居跡実測図 (S=1/80)

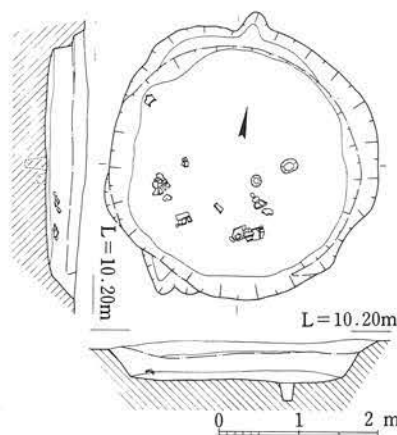


Fig. 6 SB015住居跡実測図 (S=約1/95)

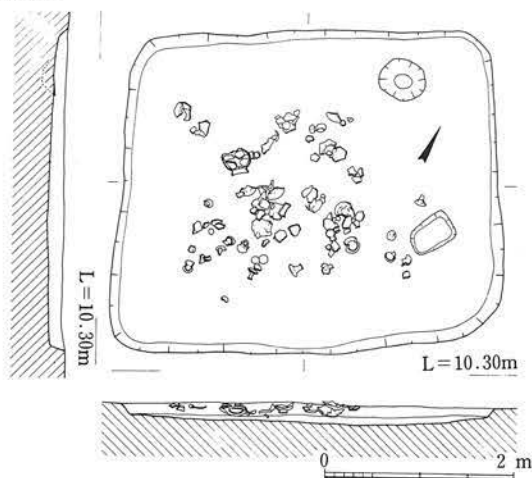


Fig. 7 SB001住居跡実測図 (S=1/80)

る。床面は中央部になるに従わずかに深くなっている。柱穴と確定できるものは検出しなかったが、東北部と東南部に深さ0.1～0.12m程度の小穴を検出した。

埋土は黒色土層と淡黒色土層とに大別でき、前者より大量の遺物が出土した。

遺物はすべて土師器であり、器種は甕形土器、鉢形土器、高坏、小型丸底埴、手捏土器等多岐にわたる。これらの遺物は中央部に集中しており、この住居跡が埋没していく途中、廃棄住居跡の祭祀として投入された可能性がある。

SB003住居跡

A—I区東南部にあってSK007の南方約15mに位置する。上面の平面形は長方形であるが、中心部で東西6.40m、南北6.26mを測り、正方形に近い。壁高は0.2m前後を測るが東壁部は0.14～0.15mと浅くなっている。床面積は約40平方メートルを測り、当調査区で最大級の規模である。床面は概ね平坦であるが十数個の

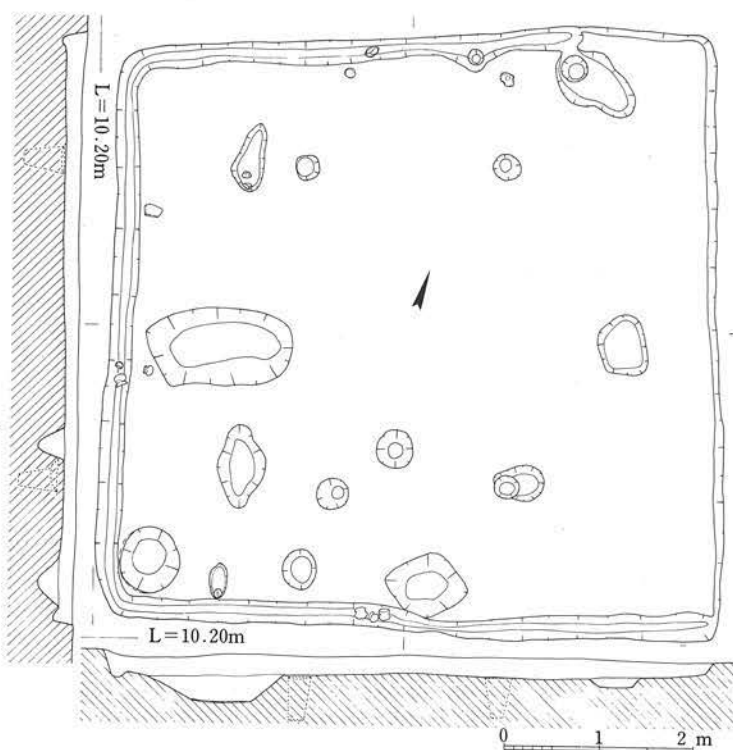


Fig. 8 SB003住居跡実測図 (S=1/80)

小穴、土壇がある。西寄りにある土壇をのぞいて当遺構に伴うものとする。柱穴と想定されるのは4箇所を確認し、径0.25～0.3m、深さ0.5～0.6m程度を測る。西南隅には径6.3m、深さ0.46mの土壇を検出したが、位置・形状から考えて貯蔵穴的なものか。炉址・カマドは検出しなかった。南・北・西壁際には測溝があり、幅0.2～0.25m、深さ0.05～0.1mを測る。

遺物については埋土のⅠ層・Ⅱ層及びピット内より検出した。器種については土師器の小型丸底埴、甕形土器、高坏、手捏土器などがある。

SB004住居跡

A—Ⅱ区中央南寄りに位置し、南北主軸は東傾、床面の標高9.95mを測る。SP001土壇墓に切られている。上面の平面形は長方形を呈し、中心部で東西5.95m、南北5.20mを測る。深さは平均0.35～0.4mを測り残存状況が最も良好な住居跡である。床面積は約30平方メートルで、

SB003に次ぐ。床面は概ね平坦であるが、ベッド状遺構、柱穴、土壇、小穴、溝状遺構を配する。ベッド状遺構は北壁東寄りから、東壁を經由し南壁東寄りまでめぐるので、幅0.75~0.8m、高さ0.1~0.15mを測る。柱穴は4箇所を検出し0.2~0.25m、深さ0.3~0.45mを測る。土壇は南壁中央部に造られているが、側

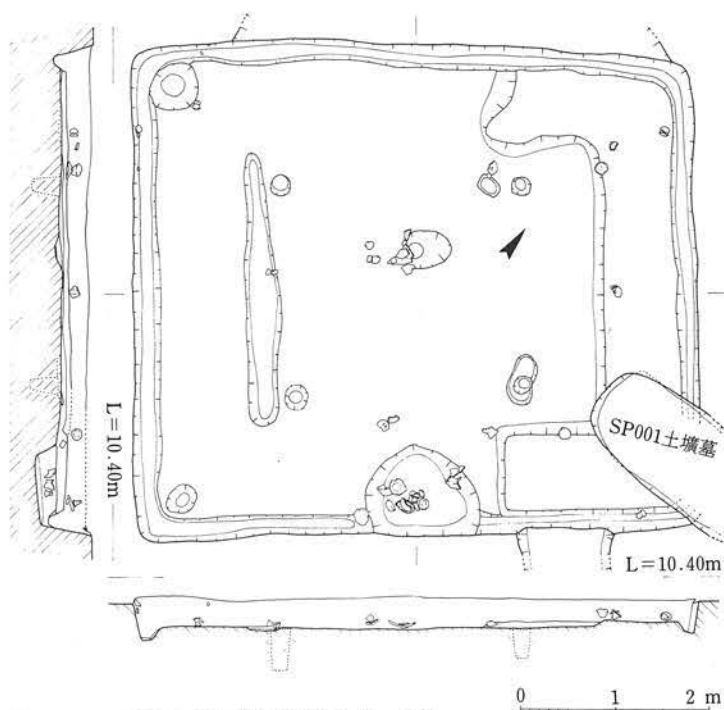


Fig. 9 SB004住居跡実測図 (S=1/60)

溝とつながっているので貯蔵用とは考え難い。入口の施設か。側溝は幅0.25~0.3m、深さ0.1~0.15mで一巡する。中央部に東西0.5m程度の小穴を検出したが炉址か。

遺物についてはⅠ・Ⅱ層より多数検出し、復元に耐えるものも多い。器種については甕形土器、壺形土器、高坏、小形丸底埴、手捏土器などがある。SB001・003と比較するとその出土状況はややSB003に近いが、やはり三種三様の感がある。手捏土器は西北部の壁面に埋め込まれたような状況で出土し、手捏土器の使用法の一つとして興味を持たれる。

SB005竪穴遺構

A-Ⅱ区東寄りに位置し、上面の平面形は方形を呈するがややいびつである。東西2.65m、南北2.7m、深さ0.05mを測る。床面積は約7平方メートルで、今回検出した竪穴遺構でSB006同様、小型のものである。床面は平坦で北壁寄りに東西0.4m、南北0.35m、深さ0.12mのピットがある。当遺構は多量の土師器を検出したが、そのほとんどが埋土上層で、地表下0.2m程度から出土した。遺物が表土下層にあったため攪乱に逢っており図化は省略した。

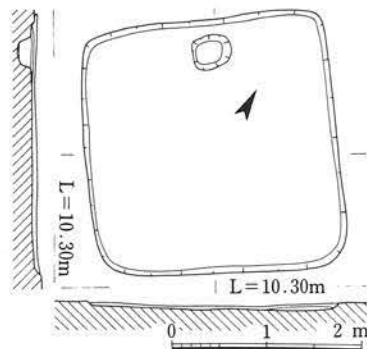


Fig. 10 SB005竪穴遺構 (S=1/60)

この遺構の種別については、住居跡とも考えたが、規模、土器の出土状況から見て竪穴遺構とした方が適

切であると判断した。

遺物の種類については、甕形土器、高坏、壺形土器等を多数検出した。

SB006竪穴遺構

A—I区東南部に位置するもので、東西2.7m、南北2.5m、深さ0.15mを測る。床面積は約6.75平方メートルである。上面の平面形はいびつな長方形を呈する。規模・形状がSB005竪穴遺構に似通っているが、床面は起伏がある。当遺構も多量の土師器を検出したが、そのほとんどが黒色の埋土に混在していたもので、土器の検出レベルと掘方の検出レベルがほぼ同一であり、土器をほとんど取り上げてしまってからプランを確認したSB005とはその状況をやや異にする。

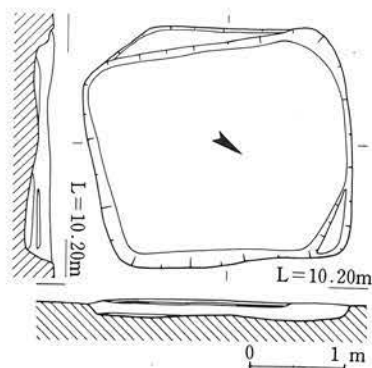


Fig. 11 SB006竪穴遺構(S=1/80)

遺物は甕形土器、壺形土器、高坏等を検出した。

2. 掘立柱建物跡

A—I区で3棟検出した。柱穴は径0.3m内外で桁数も1間×1間、2間×2間と小さい。時期的には明確に断定できる資料はないが、SK001土壌との切合い関係、埋土の色調から判断して、古墳時代のもので住居跡に並行するものと考え。遺構の性格としては倉庫的なものか。

S B 001掘立柱建物跡

A—I区中央に位置し、南北主軸は西傾20°を測る2間×2間の建物である。東西3.8m、南北3.5mで柱間隔は概ね上記の2分の1である。柱穴の掘方は円形を基調とし、径0.3~0.45m、深さ0.35~0.4mを測る。埋土は黒褐色で1~2の柱穴から土器細片を微量検出した。SK001土壌を切っている。

SB002掘立柱建物跡

A—I区中ほどにあって周辺にはSB003掘立柱建物跡、SK003土壌などがある。SB003とは1.5m、SB001とは4.5mそれぞれ離れているが、南北の主軸はほぼ同一なものとしている。2間×2間の建物で、東西4.4m、南北3.6m、柱穴径0.25~0.35m、深さ0.2~0.5mを測る。埋土は淡黒褐色土で、土器片を微量に採取したが、木片は検出しなかった。

SB003掘立柱建物跡

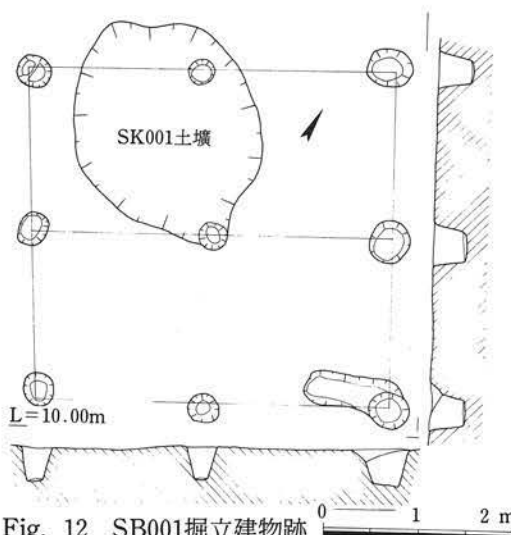


Fig. 12 SB001掘立柱建物跡

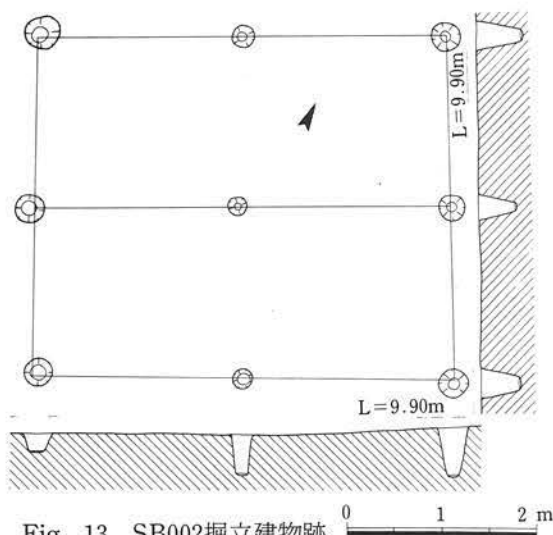


Fig. 13 SB002掘立建物跡

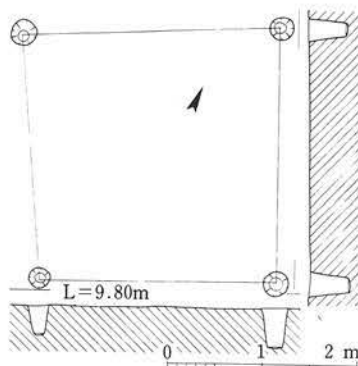


Fig. 14 SB003掘立建物跡

A—I区中央にありSB002掘立建物跡に近接し南北の主軸をほぼ同一とする1間×1間の建物跡で、当地区で最小の規模のものである。柱間は2.6～2.7mを測り、ややいびつな形となっている。柱穴径は0.2～0.28m、深さ0.3～0.4mを測る。SB002掘立建物とは主軸が同一方向であることや、北辺が同一線上にあることなどからして同時期に在存していた可能性がある。

3. 土 壙

A・B地区で検出した。弥生～中世のものがある。規模・形状は様々でその性格は不明のものが多く、その中でも特に、SK005・008・009・011土壙はその形状に規格性があり、当地域に初めて出現したもので興味深い。

SK001土壙

A—I区中央にあって、SB001掘立建物跡により切られている。上面の平面形は不整形で、中心部で東西2.5m、南北1.45m、最深部で0.75mを測る。底面には1.2×0.7m程度で掘込み面に比して狭く、起伏が多い。壁は比較的角度的をもって立ち上る。

埋土は淡黒褐色土が主体であり、土器細片を少量検出したが、時期は不明。ただしSB001掘立建物跡との関係から考えれば弥生期の所産ではなかろうか。

SK006土壙

A—I区中央よりやや東に寄った所にあって、周辺にはSK005がある。上面の平面形を呈し、中央部で東西0.45m、南北0.39m、深さ0.20mを測る。形態的にはいわゆる小穴（ピット）の中に入ると考えるが、遺構中より壺形土器が埋置された状況で検出されたので土壙として取りあつかった。

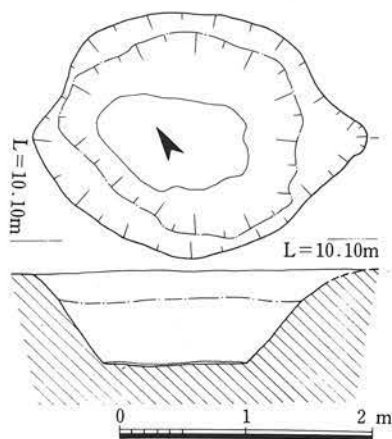


Fig. 15 SK001土壙 (S=1/60)

床面は舟底状を呈し、壁は角度をもって立ち上る。壺は東壁寄りにおかれているが、口縁部が破壊されていた。

SK016土壇

A—I区西端にあってSB015の南約1.6mに位置する。上面の平面形は多角形を呈するがこれは壁が崩壊して現況のようになったもので、元来一辺3m程度の方形を基調とするものと考ええる。

中心部で東西3.2m、南北3.18mを測る。壁高は平均0.15mを測り角度をもって掘り込まれている。床面中央にピットがあるが、焼土、炭等は検出しなかった。遺物については土器細片を少量検出した。

SK003土壇

A—I区の中ほどにあって、周辺にはSB002・003掘立建物跡、SB004住居跡などがある。上面の平面形は卵形を呈し、中央部で南北1.65m、東西1.16m、深さ0.18mを測る。底面は南壁より北に0.5m程度の所が最も深く、北壁に近づくにつれて少しずつ浅くなる。壁面は南壁が角度をもって掘り込まれているのに対し、北壁はゆるやかである。埋土は淡黒褐色土が主体となっており、その上層部より小型の甕形土器を検出した。古墳時代の所産と考える。

SK005土壇

A—I区中央東寄りに位置し、上面の平面形は隅丸長方形を基調とする。中心部で東西4.67m、南北で約2.7m、最深部で1.13mを測る。掘込み部分を6箇所にわたって小穴、土壇と切合い関係をもつが新旧関係は不明確である。床面は緩やかな起伏があり、壁は比較的角度をもって立ち上るが、北壁が最も角度をもち約60°を測る。床面積は約4.03平方メートルを測る。

埋土は上層が淡黒褐色を呈し、下るにつれて茶褐色となり床面付近は黄褐色と変化する。当遺構は中世の所産と考える。

遺物は掘込み下1m程度まで弥生から中世におよぶ土器片を検出した。

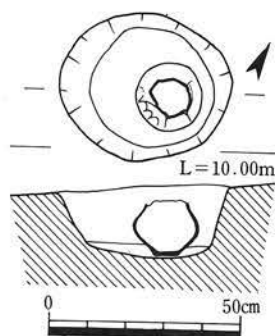


Fig. 16 SK006土壇

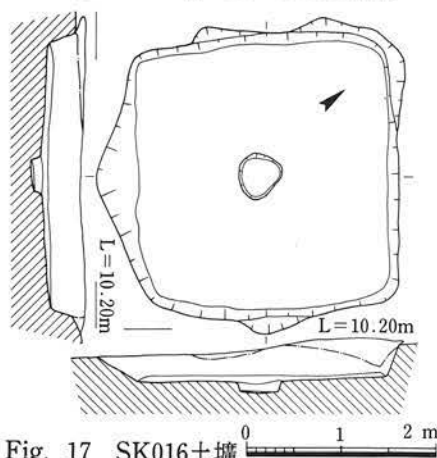


Fig. 17 SK016土壇

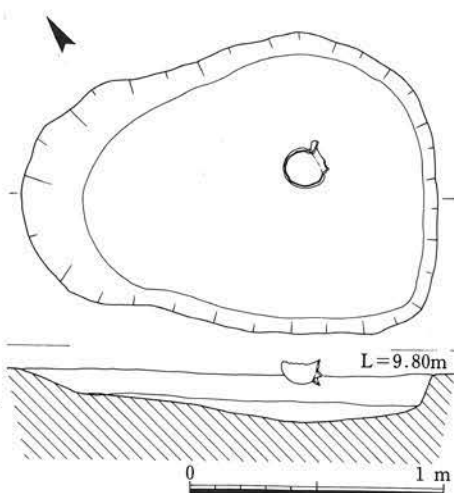


Fig. 18 SK003土壇実測図(S=1/30)

SK008土壇

A—I区南端に位置し、上面の平面形は掘込み部分が欠落しているが、隅丸長方形を基調とするものとする。中心部で東西5.05m、南北2.7m程度、最深部で1.2mを測る。床面のプランは長方形を呈し面積は約7.4平方メートルを測る。床面はゆるやかな起伏をもち壁は角度をもって立ち上るが、南壁が最も急角度である。

埋土は淡黒褐色土を主体としたものであるが、SK006のそれに比してやや薄い色調である。

遺物は埋土全体から石製品、土器片を検出したが量的にはそれほど多くない。

SK009土壇

A—II区中央部東寄りに位置し、周辺にはSK002井戸・SK018土壇などと隣接する。上面の平面形は隅丸長方形を基調としたものと

考えるが、掘込み部分が欠落し丸味を滞っている。中心部で東西4.43m、南北2.77m、最深部で1.2mを測る。床面は緩やかな起伏があり壁は角度をもって立ち上る。壁面に一周する稜があるがこれは掘込み部分が欠落・後退してできたものとする。床面積は約4.5平方メートルを測り完掘したこの種のものでは最小規模である。

埋土は淡黒褐色を主体にしたものであるが東壁寄りに一部色が黄色みがかった部分が認められた。おそらく後世の浅い土壇が切れ合ったものとする。

遺物は埋土中より土師器・陶磁器片を少量検出した。

SK011土壇

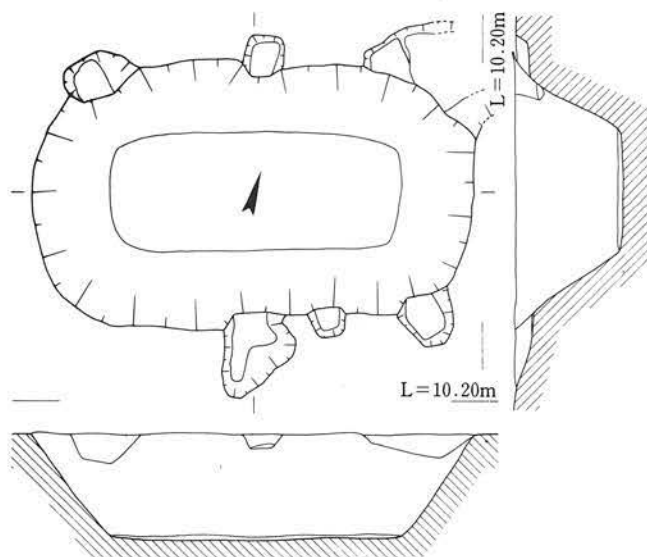


Fig. 19 SK005土壇実測図

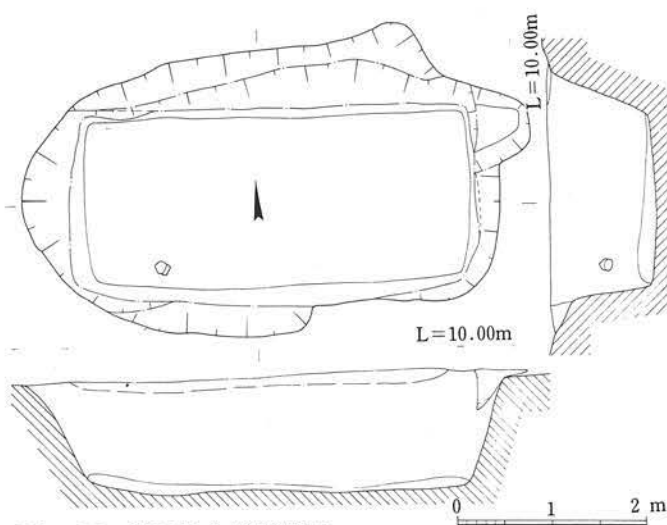


Fig. 20 SK008土壇実測図

A-I区中央北寄りに位置し、西にSK010・015住居址などがある。上面の平面形は隅丸長方形を基調としたものである。中心部で東西4.45m、南北2.48m、最深部で1.02mを測る。床面はほぼ平坦で壁は四方とも比較的角度をもって立ち上る。床面積は約5.5平方メートルを測る。

埋土は淡黒褐色土と淡黄褐色土からなっており下層になるに従いやや砂粒が増加する。

遺物は埋土中より土師質土器を少量検出した。

4. 井戸

古墳時代の井戸をA-I区、A-II区でそれぞれ1基ずつ検出した。埋土中からは土師器が多量に出土したが、井戸を廃棄する時、祭祀に使用したものか。

SE001井戸

A-I区北東端に位置する素掘の井戸である。上面の平面形は一辺約1.3mの隅丸方形を基調としたものであるが、掘込下1m付近から円形に転じる。深さは約2mまで掘り下げたが、湧水と井戸径が小さくなったためにそれ以下の調査を断念した。埋土は上層部0.5m程度が藁灰状混りの黒褐色土、それ以下が淡黒褐色となる。遺物は主として掘込み下0.2~0.8mの間で検出し、すべて土師器であった。その中でも高坏（脚部）の全体量に対する比は注目

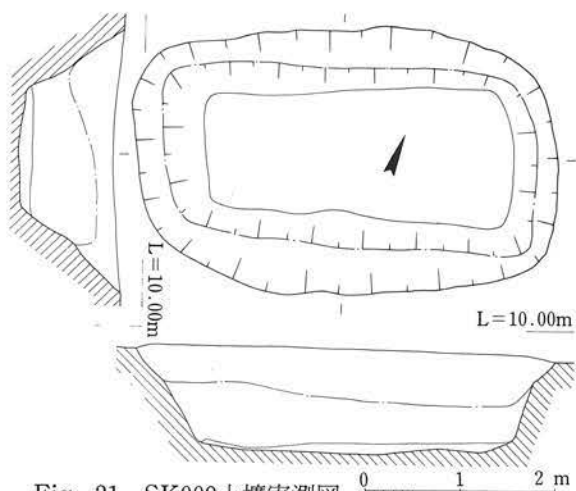


Fig. 21 SK009土壌実測図

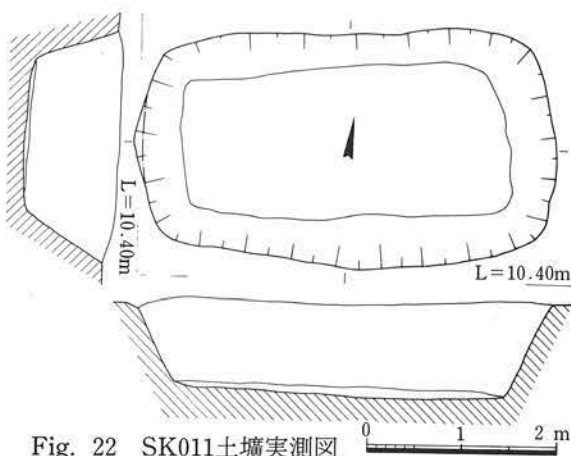


Fig. 22 SK011土壌実測図

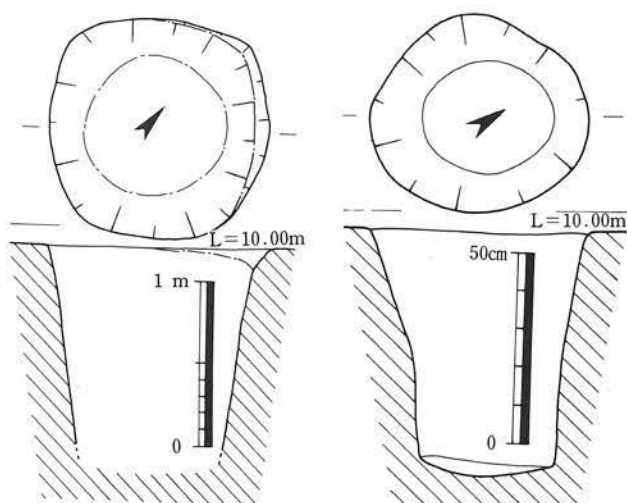


Fig. 23 SE001井戸

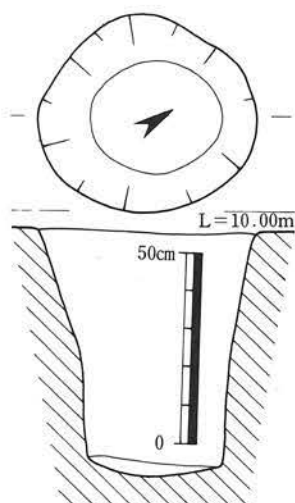


Fig. 24 SE002井戸

するものがある。

SE002井戸

A-II区東端に位置し、上面の平面形は東西1.15m、南北1.06mを測る楕円形を呈する。深さは中央部で1.3mを測る。掘込み下0.5m付近から径が0.8m程度と狭くなり、底面は舟底状を呈する。

埋土は黒褐色土と淡黒褐色土に大別できるが、その双方より土師器を検出した。

遺物は高坏、小形丸底埴、甕形土器等を検出した。

5. 土 墳 墓

A地区において検出し、中世の所産と考えられるものである。当遺構一基のみで群集する傾向はみられない。

SP001土墳墓

A-II区中央南寄りに位置し、SB004住居跡の南東コーナーを切っている。上面の平面形は隅丸長方形を呈し、中心部で長軸2.21m、短軸1.0m、深さ0.4mを測る。床面はわずかに舟底状を呈し、壁は角度をもって立ち上る。

埋土は黒褐色を呈し、SB004のそれとほぼ同色であった。遺物については多量に検出したが、そのほとんどが床直のものであった。器種としては、土師器坏、碗、台付皿、青磁碗、鉄器、銅鏡などがある。

6. 溝

B地区に集中しており、時期的には中世から近世にかけてのものである。B-II区では大小の溝が多数切れ合っている。新旧関係

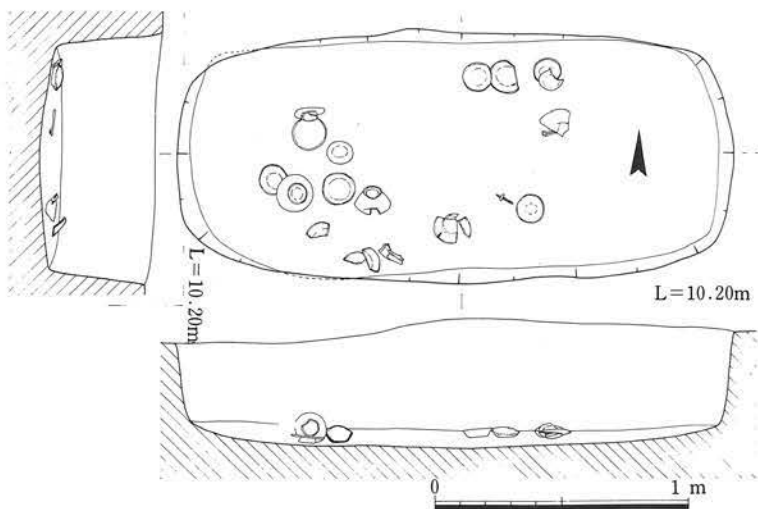


Fig. 25 SP001土墳実測図

は埋土の色にあらわれており、時期が新しくなるに従い黒褐から淡褐色に変化する。

規模は上面幅0.3~1.5m、深さ0.2~0.5m程度、検出全長は最大のもので58mを測る。遺物については土師質坏・皿、磁器碗等を少量検出した。

IV. 遺 物

各種の遺構より多種多様の遺物を検出した。ここでは基本的には遺構別又は時期的に図版化

し、その特徴を記述する。

SK006土壇出土遺物（1）

1は底径6.3cm、残存高18.6cmを測る。外面頸部から胴部にかけて5条の沈線を有し、肩部の沈線にはさまれた区画にヘラ描きの連弧文を有する。器面調整はヘラミガキとナデによる。

SK012土壇出土遺物（10・11）

10は甕形土器の底部で径7.2cm、残存高7.8cm。11は土製紡錘車で、径5.5cm、厚さ1.0cm、孔径0.5cmを測る。表裏面を平坦にする為板状のものに押しあてている感がある。

SK015住居跡出土遺物（2～4・6・7・9・12）

2は径13cmを測る壺形土器で器面内外共にヘラミガキを施している。3は底径8.2cmの壺形土器の底部で外面にヘラミガキ、指頭圧痕が見える。4は径33.6cmの甕形土器である。内外面共に磨滅が進んでおり調整は不明。6・7は口径21.2～21.8cm、2条の突帯部を有しそこに指突文を配する。ヘラミガキの痕がかすかに見られる。9は口径14.1cm、器高10.2cm、底径4.8cmを測るミニチュアの鉢形土器である。底部はやや上底で端部断面は三角形を呈し体部は角度をもって立ち上る。口縁部はわずかに内傾する。調整はヘラミガキと指頭圧によるものである。12は磨製石斧で残存長17cm、断面幅8.2cmを測る。

SK016土壇出土遺物（8）

8は口径25.8cm、残存高3.3cmの浅鉢形土器である。外面にはヘラミガキによって稜を明確に形成している。

SB001住居跡出土遺物（13～28）

13・14は手捏土器。13は口径3.3cm、器高2.0cm、14は口径5.3cm、器高1.8cmを測る。調整は指頭圧・ナデによる。15～22は小型丸底甕で最大径が口縁部にあるものと胴部にあるものとに大別できる。調整は外面がナデ、ハケ目、内面がヨコナデ、ナデによっている。法量は口径8.3～13.3cm、器高8.6～12.6cmを測る。23は鉢形土器であるが、底部に焼成前の穿孔があり、小型のこしき状を呈する。口径12.9cm、器高10.6cm。調整は内外面共にヘラケズリとナデによっている。24は受部径16.6cm、器高11.6cm、脚部径11.3cmを測る。調整は主として、ヨコナデとナデによる。25は口径19.6cm、器高14.1cm、脚部径13.1cmで全体的に薄い器壁をもつ。口縁部は坏部外面の稜付近からわずかに外反気味にのび、端部は先鋭化する。脚部裾も外反気味にのび、口唇部と同じくらい先鋭化する。26は口径14.9cm、器高21.6cmを測る丸底の壺形土器である。球形の胴部をもち最大径は胴中央に有する。頸部より角度をもって口縁部は立ち上り口唇部で外反する。調整は外面がヨコナデとハケ目、内面が上方に向けてのヘラケズリと横方向のヘラケズリを有し、口縁部はヨコナデによる。27は口径18cm、器高25.3cmを測り丸底の底部をもつ壺形土器である。器形は26に比してやや底部が突出し、肩部の張りが少ない。口縁部は角度をもって外反気味に立ち上り、端部は丸味をおびる。28は口径14.6cm、残存器高25.7cmを測

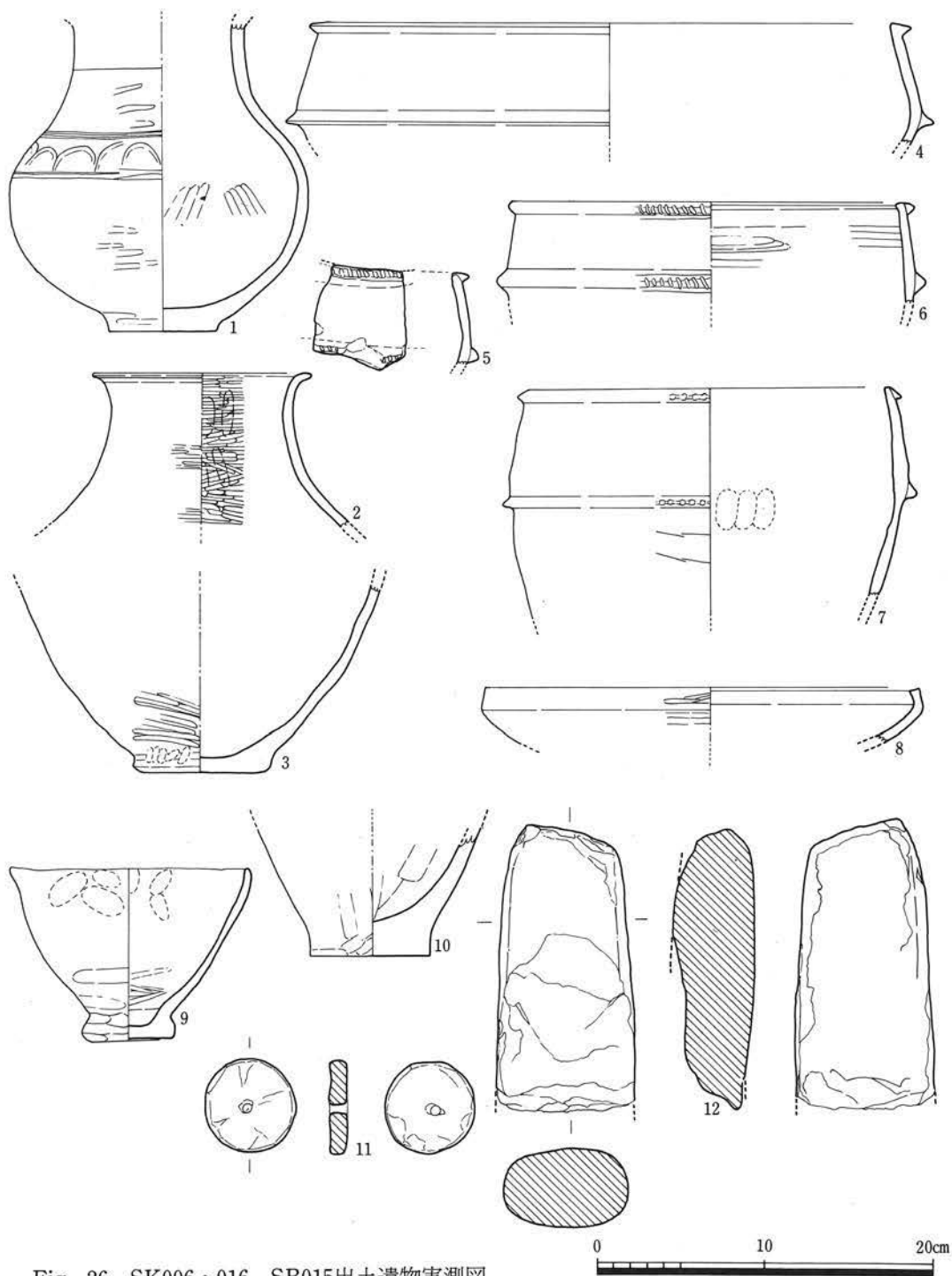


Fig. 26 SK006・016、SB015出土遺物実測図

る壺形土器である。胴部の法量の割に口径が小さく、そのため、肩部は異常に発達している様相を呈する。口縁部は直線的に立ち上り、端部はわずかに内傾気味で口唇部上面は平坦である。

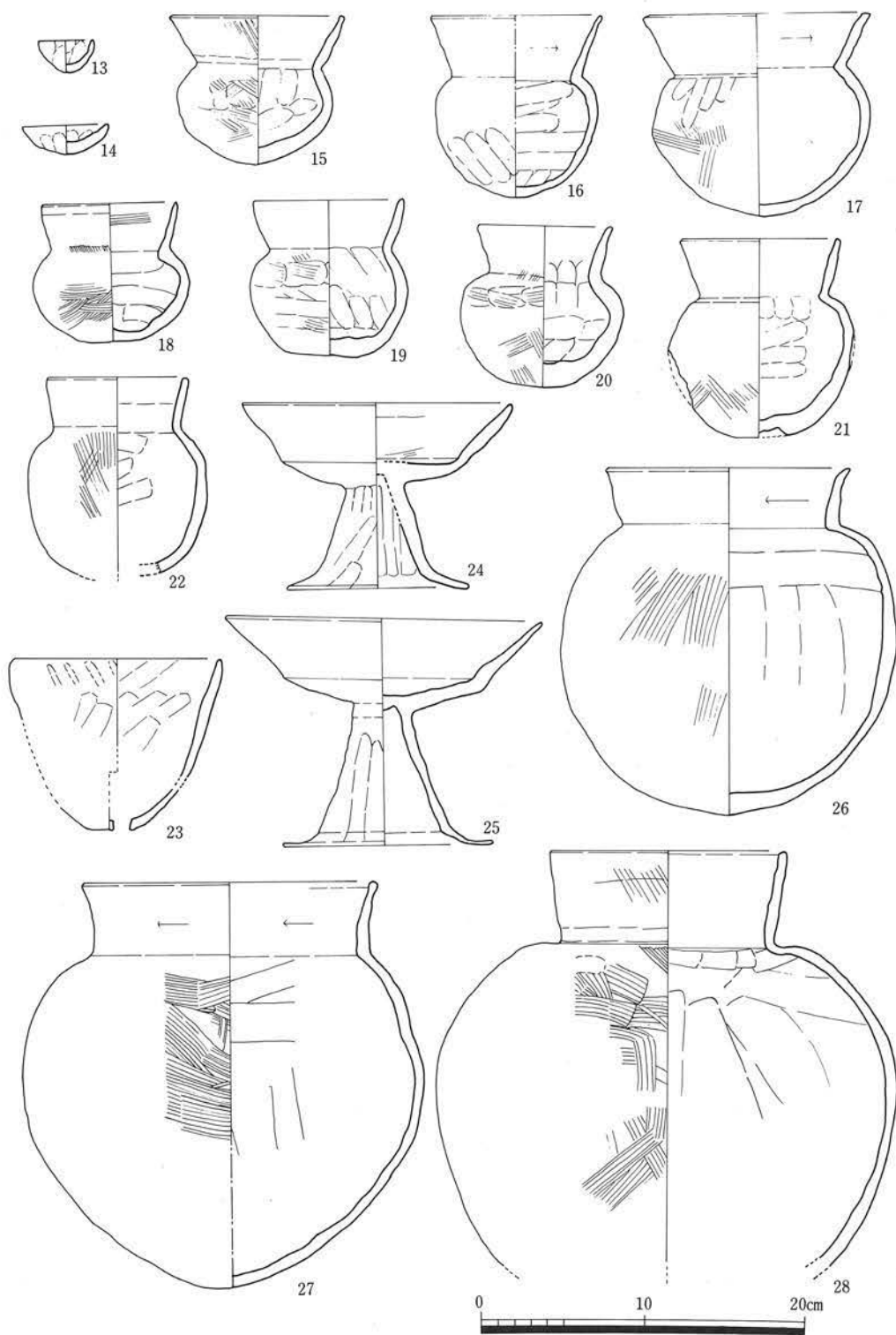


Fig. 27 SB001住居跡出土土器実測図 (S=1/4)

調整は外面がハケ目とヨコナデ、内面がヨコナデとヘラケズリとなっている。

SB003住居跡出土遺物 (29~36)

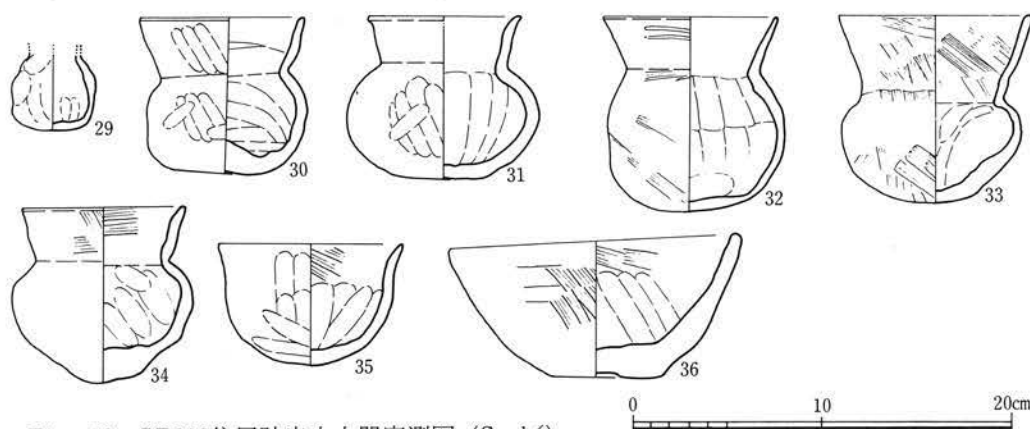


Fig. 28 SB003住居跡出土土器実測図 (S=1/4)

29は手捏土器で残存高4.1cmを測る。調整は内外面共主として指頭圧、ナデによる。30~34は小形丸底埴であるが、全体的に見て企画性に乏しく、各個体各様である。30は口径8.6cm、器高8.2cm、で調整は主としてナデによる。底部は平底状を呈する。31は口径8.8cm、器高8.1cmで胴部が発達している。32は口径9.2cm、器高10.3cmとこのグループで最大の法量があるが、頸部のくびれが少なくまのびした感がある。内面胴部に横方向のヘラケズリが二段にわたって見られる。33は口径10.2cm、器高9.9cmで、最大径を口縁部にもつ。頸部は強くくびれ、口縁部はわずかに内湾気味に立ち上る。外面、内面口縁部に細かいハケ目を有する。34は口径8.7cm、器高9.4cmを測り、器厚が全体的にみて不均等である。調整は主としてナデとヨコナデによる。35はミニチュアの鉢型土器で口径9.6cm、器高6.9cmを測る。丸底の底部から内湾気味に立ち上り、口縁下部より外反する。調整は主としてハケ目とナデによる。36は口径15cm、器高7.2cm、底径5.7cmを測る鉢形土器である。法量に比して器壁が厚く最大で1.8cmを測る。調整は主としてナデとハケ目による。

SB004住居跡出土土器 (37~57)

37~40は手捏土器。37~39は口径4.0~5.0cm、器高1.8~1.9cm、40は口径6.6cm、器高3cmを測り調整は指頭圧とナデによる。41は口径7.8cm、器高5.2cmを測り平底状の底部を有する。形成法は手捏土器と似通っている。42~43は鉢型土器、45のみ法量が多い。42・44は口径10.5~13.2cm、器高6.4~8.5cm、45は口径14.5cm、器高10.5cmを測る。器形は基本的には丸底の底部から内湾気味に立ち上り、調整はナデ・ヘラミガキを主体としている。45のみ口縁部の形態が特異で内部に稜をもつ。47~49は器台。47で口径6.9cm、器高6.5cm、底径8.8cm。坏部は内湾気味に立ち上り端部は丸味をもつ。調整は主としてヘラミガキ、ハケ目、ヨコナデによる。くびれ内部に焼成前の穿孔を有する。48は口径7.6cm、器高7.0cm、底径8.4cmを測り、坏端部は

わずかに外反気味である。調整はヘラミガキ、ハケ目、ナデによる。49は口径7.2cm、器高・底径は不明。調整は主としてハケ目とナデによる。50～52は小型丸底埴である。3個体とも端正なつくりで最大径は口縁部にもつ。50は口径7.3cm、器高6.3cm、調整はヨコナデとヘラミガキを主体としている。51は口径8.8cm、器高8.4cmを測り、胴部に比して大きい口縁部をもつ。調整は内外面のヨコナデ、内面胴部のヘラケズリを主体としている。52は口径9.0cm、器高8.2cmあまりを測る。口縁部は内湾気味に立ち上り端部は薄くなる。54～57は高坏の坏部と脚部であるが、それぞれ接合関係はない。54は口径15.7cmを測り口縁部は坏部底部よりあまり角度をなさず延びる。55は口径16.0cmを測り底面より角度をもって立ち上り、端部はやや外反する。54・55は脚径10.1・12.5cmを測る。58は口径13.6cmを測る甕形土器である。胴部は球形を呈すると

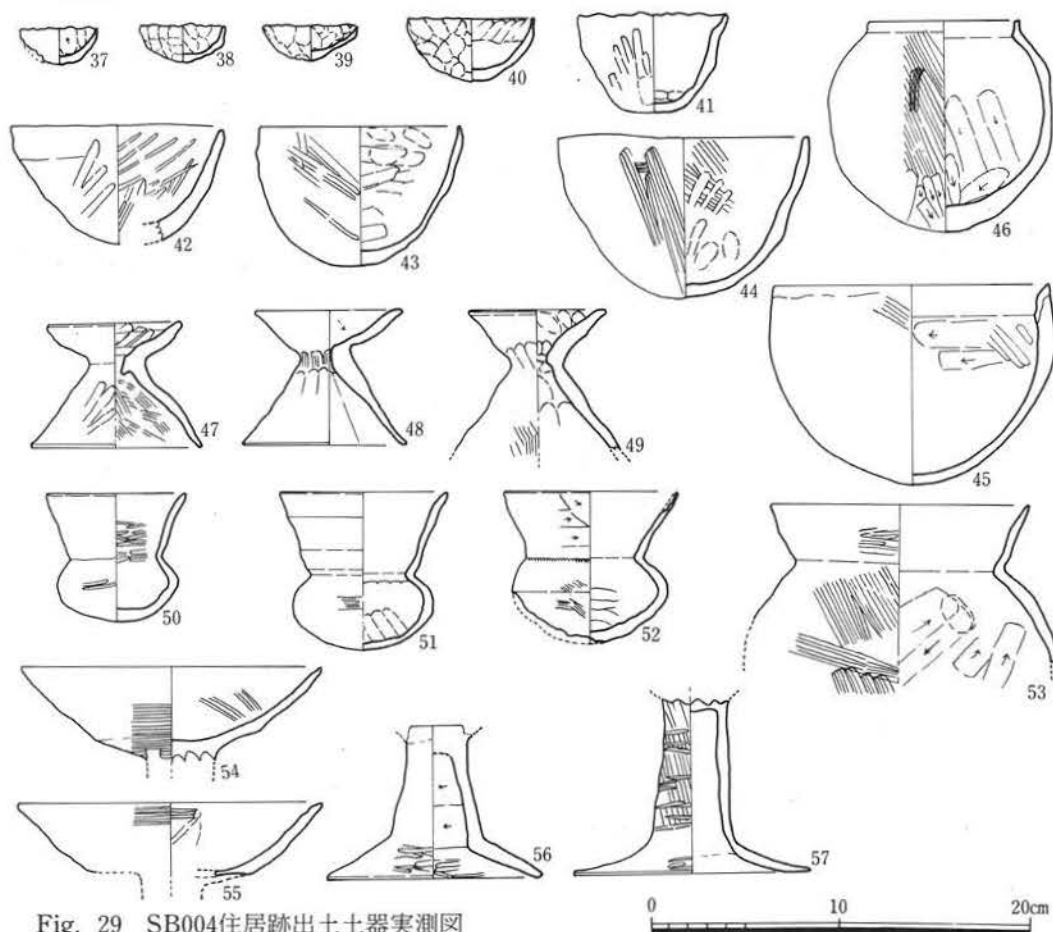


Fig. 29 SB004住居跡出土土器実測図

想定され、口縁部は直線的に角度をもって立ち上る。調整は外面ヨコナデとハケ目、内面ヨコナデ、ハケ目、ヘラケズリを主体としている。

SB005竪穴遺構出土土器 (58～63)

58は小型丸底埴。口径約10.5cm、器高約5.8cmを測り、全体的に均整がとれていない。59は台

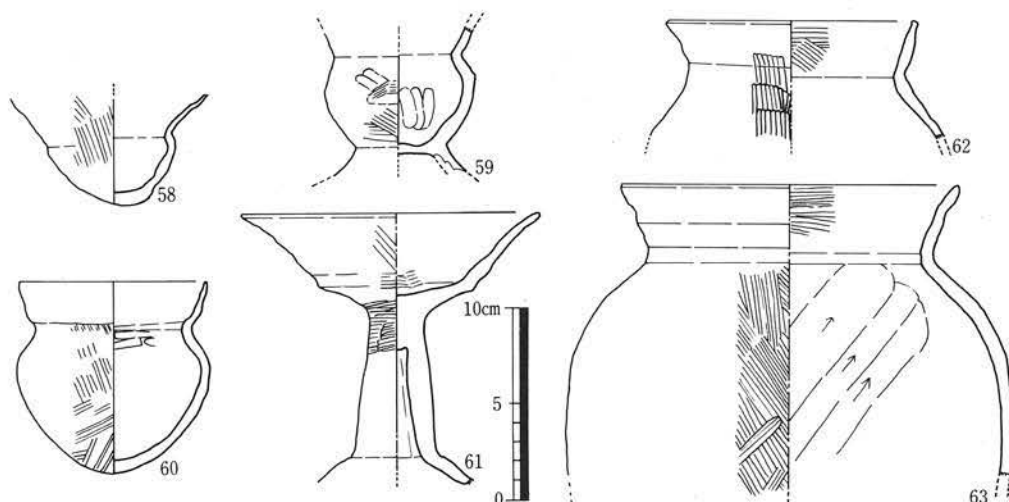


Fig. 30 SB005竪穴遺構出土土器実測図

付の小形埴と考える。残存高7.5cm、調整は外面ハケ目とナデ、内面ナデを主体としている。60は口径9.8cm、器高10.1cmを測る小型の壺形土器である。最大径を肩部に有し、口縁部は複合口縁状を呈する。調整は外面ヨコナデ、ハケ目、内面ヨコナデ、ヘラケズリを主体とする。61は口径15.8cm、残存器高14.5cmを測る。口縁部は坏底部より外反気味に延びる。62は口径13.8cmを測る甕形土器である。口縁部は角度をもって直線的に延び、端部は丸味をもつ。調整は主としてハケ目とナデによる。63は口径17.7cm、残存器高15.8cmを測る甕形土器である。肩部は発達せず頸部のくびれも少ない。口縁部はやや外反気味に立ち上り、端部は丸味をもつ。調整は外面ヨコナデとハケ目、内面ハケ目とヘラケズリを主体としている。

SB006竪穴遺構出土土器 (64~71)

64は手捏土器で口径5.3cm、器高2.8cmを測り、調整は主として指頭圧、ナデによる。65は口径10.5cm、器高3.8cmを測る。体部は丸底の底部よりゆるやかに立ち上り、口縁部は外反する。調整は外面ヨコナデとヘラケズリ、内面ヨコナデとヘラミガキを施している。66は口径7.7cm、器高4.1cmを測る手捏様の坏である。調整は主としてナデと指頭圧による。67は口径13.0cm、器

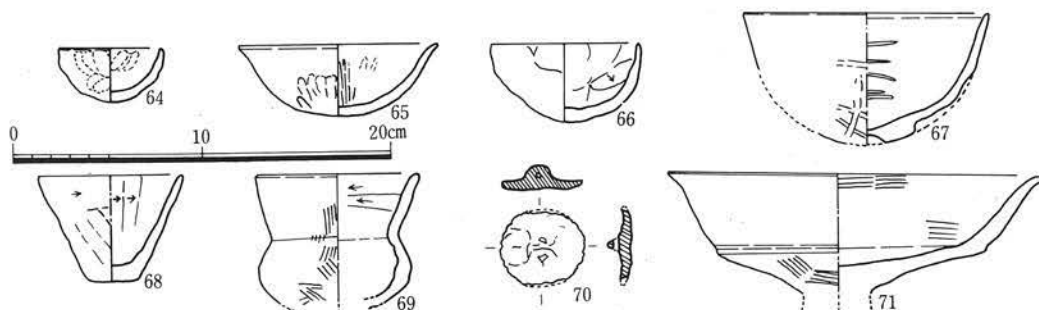


Fig. 31 SB006竪穴遺構出土土器実測図

高約6.9cmの鉢型土器であるが、体部外面下半部に剝落が多い。調整はヨコナデ、ヘラミガキを主体としている。68は口径7.6cm、器高5.6cm、底径2.7cmを測るミニチュアの鉢型土器である。底部より口縁部は直線的に立ち上り、端部は丸味をもつ。調整は外面ナデ、内面ヘラケズリとナデによる。69は口径8.5cm、残存器高6.7cmを測る小型丸底埴である。調整は主としてハケ目、ヨコナデ、ナデによる。70は長径4.4cm、短径約4cm、器高1.2cmを測る土製鏡と考える。中央部に指腹によるつまみあげで形成された鈕を有し、そこには短径側に焼成前の穿孔がある。71は口径19.9cm、残存器高6.3cmを測る高杯の坏部である。底部と口縁部の接口面は容易に認められ外面に稜を有する。口縁部は外反気味に立ち上り、端部に至ってさらに外反する。調整は主としてハケ目、ヨコナデによる。

SE001・002井戸出土土器 (72~76)

72は SE001出土の手捏土器。口径3.1cm、器高2.3cmを測り、口縁端部は強いヨコナデにより形成され内側に稜を有する。73は最大径を胴部中央にもつ小型丸底埴で口径8.2cm、器高9.2cm、最大径8.8cmを測る。全体的に見て法量に比して器壁が厚い。74は口径21.4cm、残存高5.9cmを測る高杯の坏部で口縁部は外反する。75は高杯の脚部で脚径15.3cm。調整はナデとヨコナデを主体としている。76は口径16.1cm、残存高12.8cm。口縁部は張りのない肩部から角度をもって

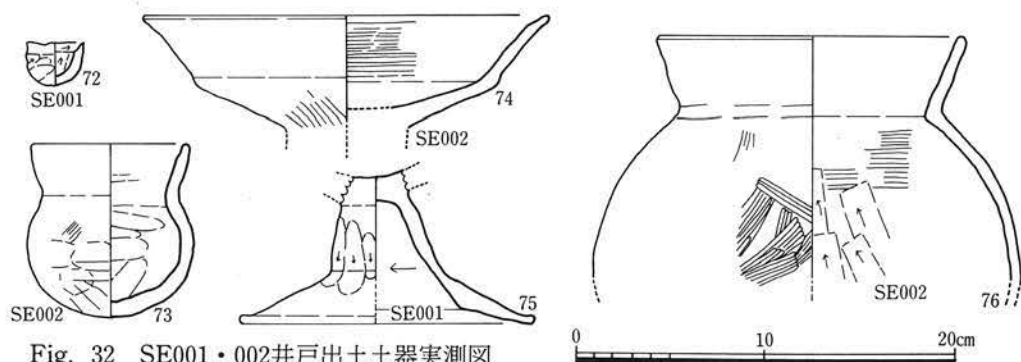
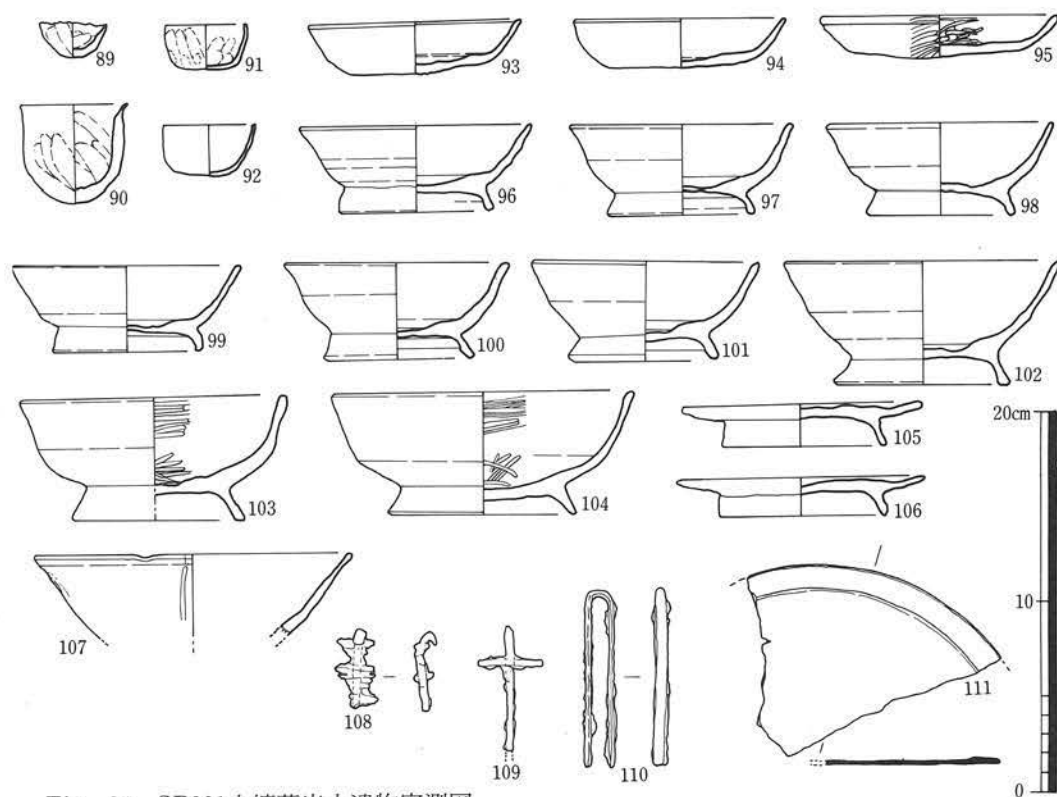
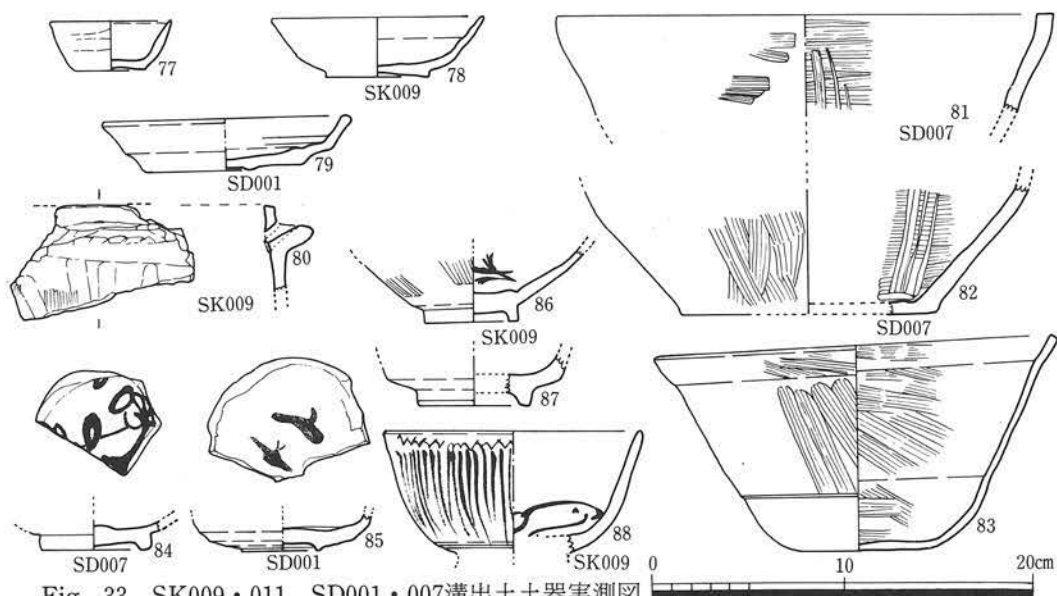


Fig. 32 SE001・002井戸出土土器実測図

直線的に立ち上る。調整は口縁部内外面共にヨコナデ、胴部は外面ハケ目とナデ、内面ハケ目とヘラケズリによる。

SK009・011, SD001・007出土土器 (77~88)

77・78は SK009出土の土師質土器。77で口径7.9cm、底径4.6cm、器高3.2cm。76で口径11.1cm、底径5.5cm、器高3.1cmを測り、ロクロ回転はそれぞれ右で底部は双方共糸切り底である。79は口径12.8cm、底径8.3cm、器高2.7cmを測り底部は糸切りの後板目。83は口径20.6cm、器高10.9cm、底径7cm余りで底部は丸底気味。体部は直線的にのび口縁部でわずかに内湾する。調整は内外面共にハケ目とナデによる。外面の一部に二次焼成痕有り。84~88は磁器。8.6は高台径4.9cm、残存高3.5cmを測る青磁碗で外面底部付近は露胎。文様は内外面の一部に櫛目文を有する。88は口径13.3cm、残存器高6.4cmを測る青磁碗である。



SK001出土遺物 (89～111)

89～92は手捏土器。89は口径3.6cm、器高1.8cmを測り丸底。90は口径5.7cm、器高5.2cmを測

る。調整はていねいなナデ。90・91は口径4.3～4.9cm、器高2.3～2.7cmを測り、底部は丸味をおびた平底。双方共黒色を呈し、器面はナデによりていねいな造りである。93・94は口径11～11.2cm、器高2.6～2.7cmを測る土師質の小皿である。底部に柱状圧痕を有する。95は口径12.3cm、器高2.3cmを測る小皿であるが外面の一部をのぞいて黒色又は黒褐色を呈し口縁部内外面共にヘラミガキを施している。96～104は高台付の坏で96～101、102、103・104の3つの群に大別できる。96～101は口径11.5～12.2cm、器高4.0～5.3cm、高台径4.7～7.9cmを測る。回転方向はすべて右。102は口径14.3cm、器高6.5cm、高台径8.9cmを測る。103・104は内黒の坏で口径13.9～15.7cm、器高6.4～6.5cm、高台径9.2～9.5cmを測る。坏部内外面共にヘラミガキが施されているが、外面は磨滅が進んでおり明確でない。105・106は台付皿、口径12.4～13.1cm、器高1.9～2.2cm、高台径8.3～8.6cmを測る。皿部には反りがほとんどなく、内面底部には一定方向の強いナデがある。107は口径16.6cm、残存器高4.3cmを測る青磁碗である。色調は青緑灰色で釉薬はうすい。口唇部にくぼみがあるが、この個体が破片であるため全体に何箇所あるかは不明。108・109・110は鉄器。108は縦4.3cm、幅0.4cmを測り、種別は釘か。109は径3.5cmの円盤に長さ6.5cm程度の棒状のものを差入れてあるが、用途は不明。110は長さ9.4cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測りピンセット状を呈する。3個体とも鏡片付近より検出。111は鏡片で径24cm(復元)を測る。厚さは中心部付近で0.2cm、鏡縁付近で0.3cmを測る。

V. ま と め

今回の調査で住居跡7軒、掘立建物跡3棟、土墳墓1基や井戸、土壇、小穴、溝等多種多様の遺構を検出した。時期的には弥生時代・古墳時代・中世に断続的におよんでいる。

弥生期の主な遺構として住居跡を4軒検出したが、SB001・014・015住居跡については前期、SB002住居跡については中期と考える。この中の前期のものは、いわゆる弥生時代中頃の展形的な円形住居とは規模・様相に少々違いがあるように感じられ、貯蔵穴的な土壇とも考えたが、大門西遺跡^{註1}に住居跡の類例があったのでそのように扱った。

古墳時代の遺構としては住居跡・掘立柱建物跡・井戸という取合せで、生活をするとして最小限必要な施設ということができる。これらの住居は、このA地区保存部分においてもあと2～3軒程度しか存在しないものと考えられるが、そうなれば5～8軒程度の住居群が当時最小の集団単位となるのではないだろうか。

また、住居の祭祀について特徴的なことがSB003住居跡にある。それは小形丸底壇を住居壁（南・北・西壁）の中央ほどに2～3個ならべており、何やら恣意的なものを感じさせる。これは神埼町の五本黒木遺跡^{註2}にもその例がある。

古墳時代以降数百年の空白があり、平安時代末期にSP001土壇墓、鎌倉期にSK005、SP008に見るような土壇が造られ、室町～江戸期にかけて溝が造られる。特筆に値するのはやはりSP001土壇墓であろう。これに近い時期の墓については、佐賀市内では明確なものとしては蓮池町上天神遺跡^{註3}で木棺墓を1基検出したのみで貴重な資料といえる。墓壇内より多数の土師器とともに銅鏡片、青磁器片、鉄器を検出した。銅鏡取上げ後その直下に薄板が鏡片状に残存しており墓壇の木蓋の存在とともに、鏡片を木蓋の上に置く葬送儀礼を思わしむる様相がある。

土壇については、SK005・008・009・011土壇を以後大型土壇という名称を用いたい。これらの遺構については少なくとも佐賀市内では初現的なものであり、その性格を特定し難いが、規格性があることや湧水が多いことから土取、貯蔵穴的施設ではないようである。特徴を上げると主軸はこの南北に長い丘陵に直交している。掘方は多少の差こそあれ隅丸長方形を基調としている。掘方上面の面積は概ね4.8～9.0平方メートルで時期は鎌倉期のものである等。

以上、調査のまとめを箇条書的に記述したが、詳細の検討については今後資料の増加をまって後日再度行いたい。

註1. 高瀬哲郎他『大門西遺跡』佐賀県文化財調査報告書第51集 昭和56年

2. 神埼町教委緒方氏の御教示による。

3. 福田義彦『上天神遺跡』佐賀県佐賀地区河川改修事務所 昭和59年

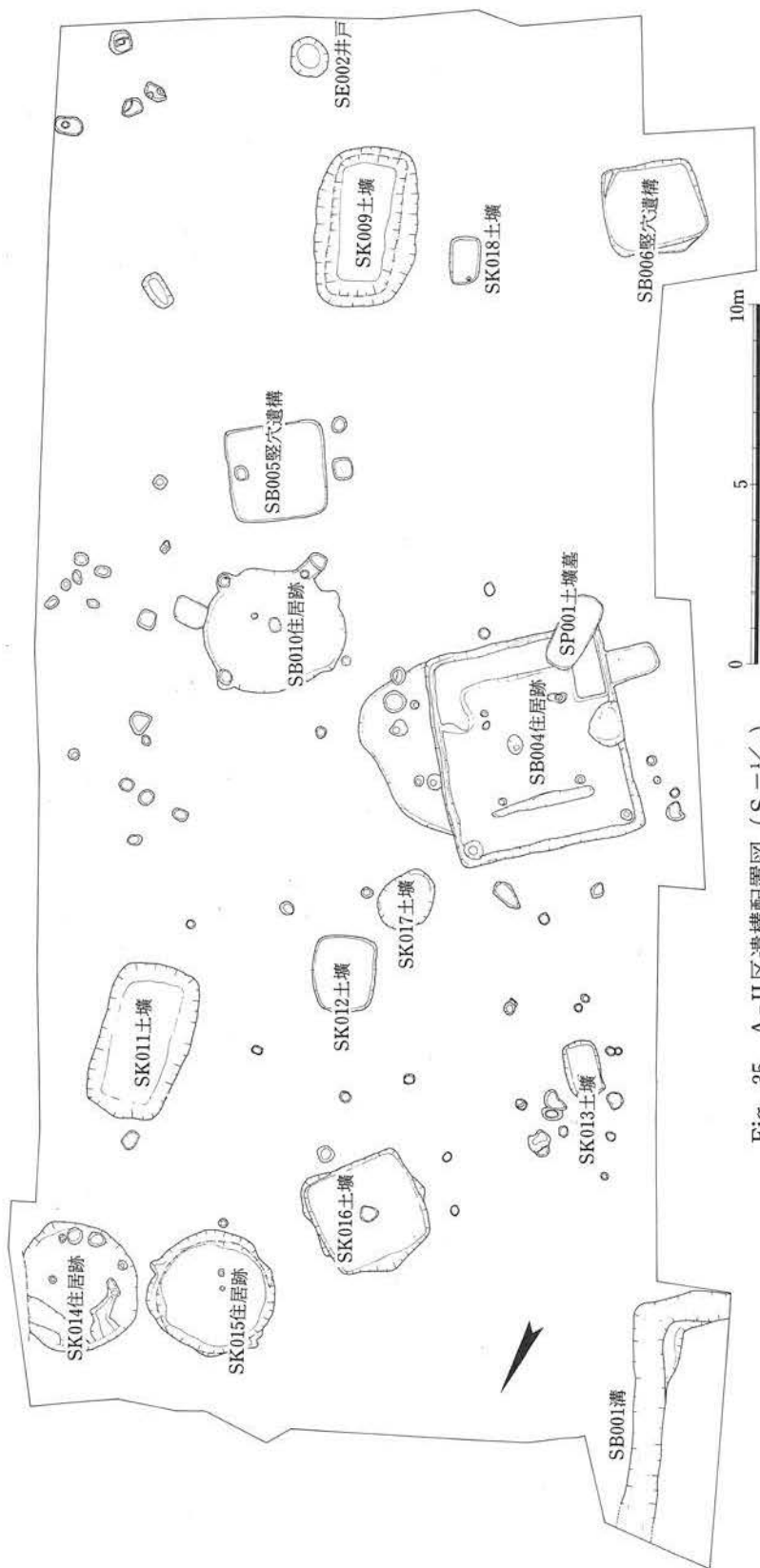


Fig. 35 A-II区遺構配置図 (S=1/400)

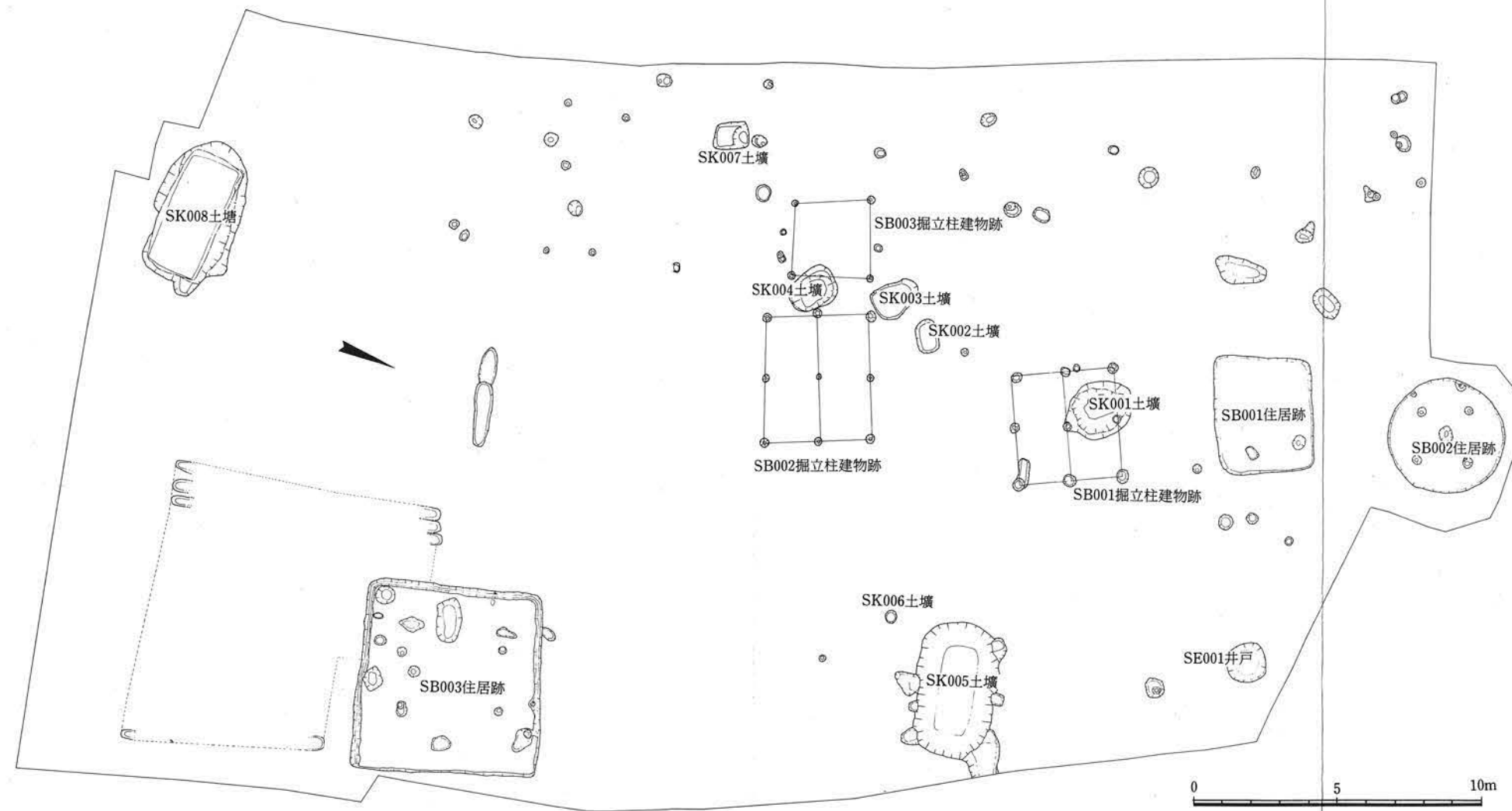


Fig. 36 A-I区遺構配置図 (S=1/400)

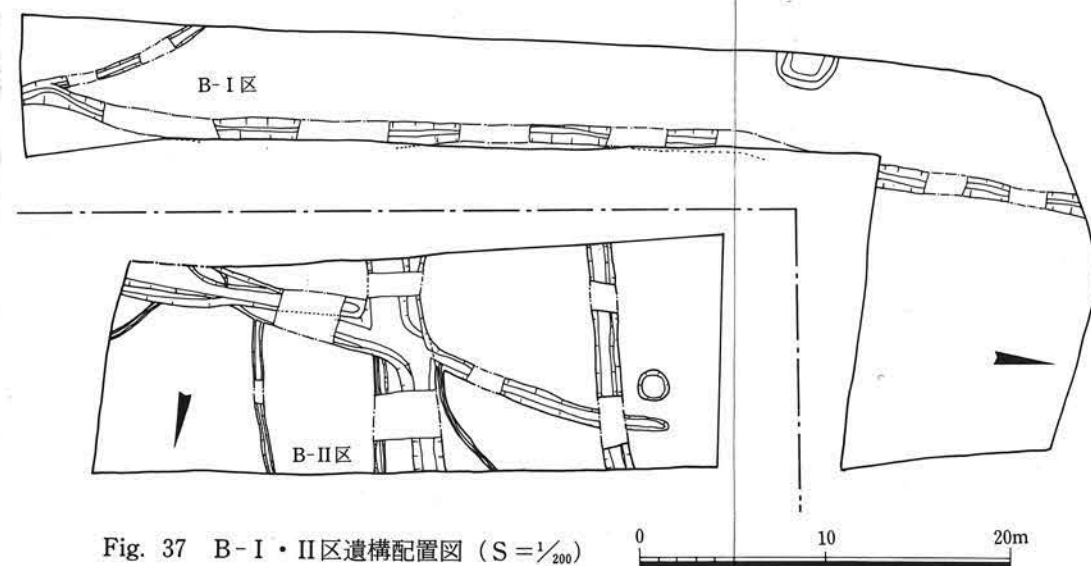


Fig. 37 B-I・II区遺構配置図 (S=1/200)

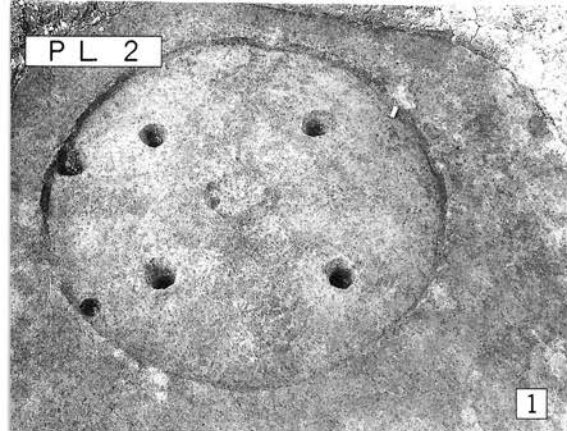
版 図



1. A—I·II区全景

2. A—I区全景

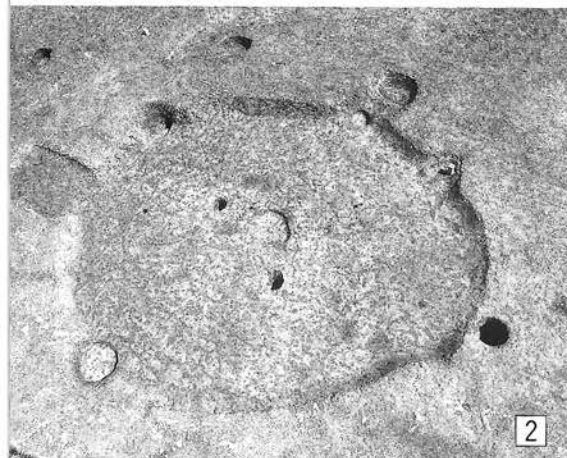
3. A—II区全景



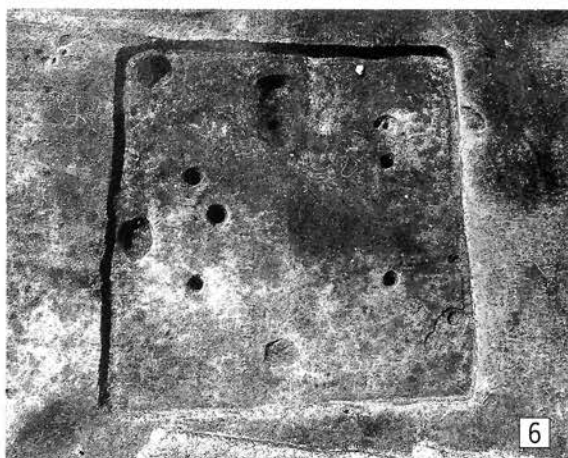
1



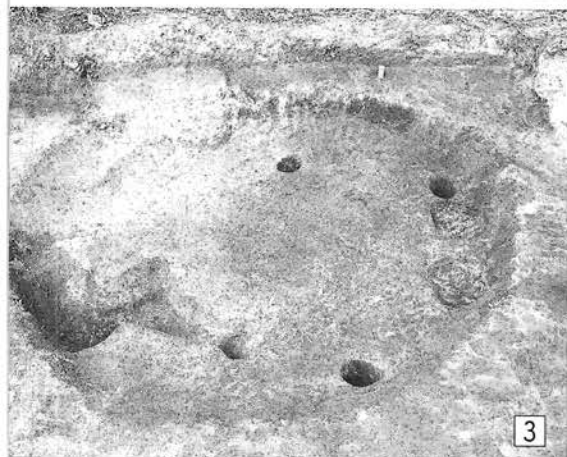
2



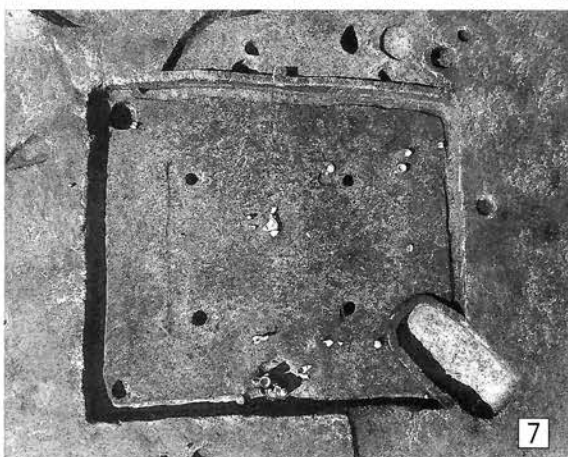
2



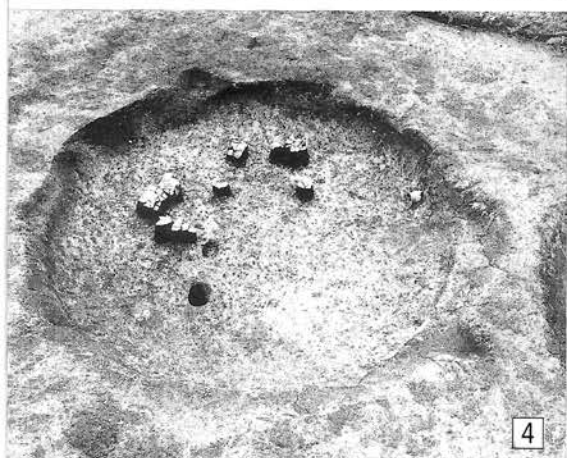
6



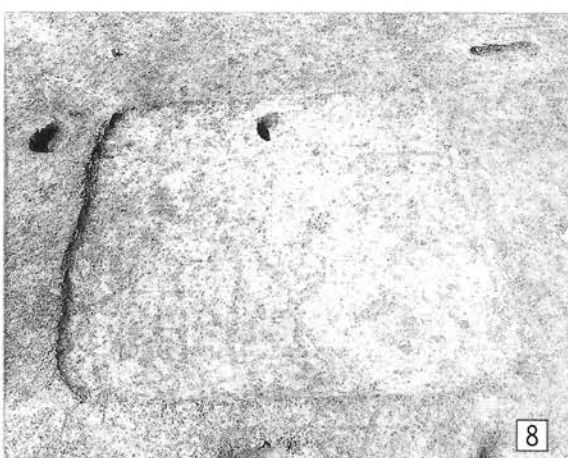
3



7



4



8

1. SB002住居跡

2. SB010住居跡

5. SB001住居跡

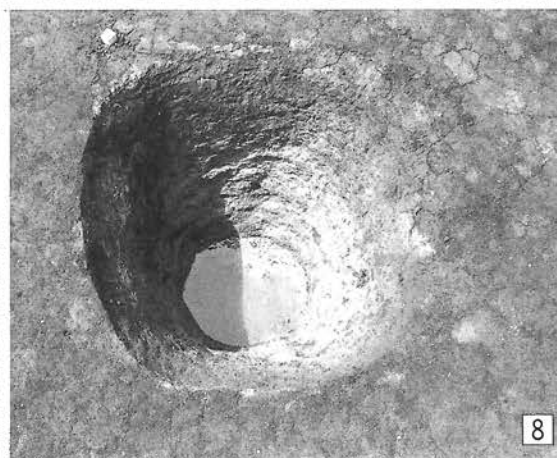
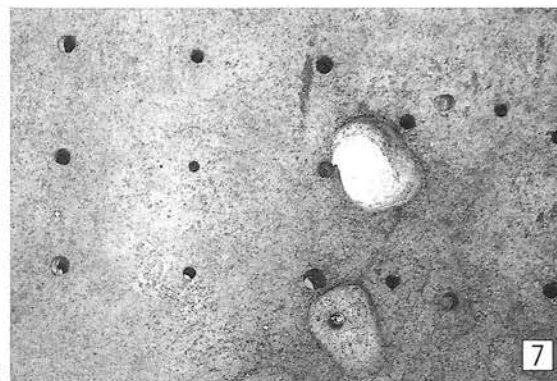
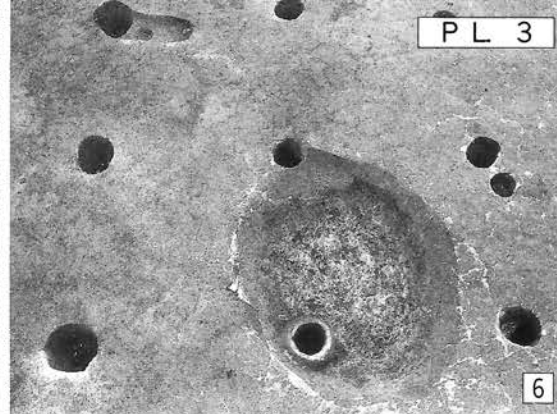
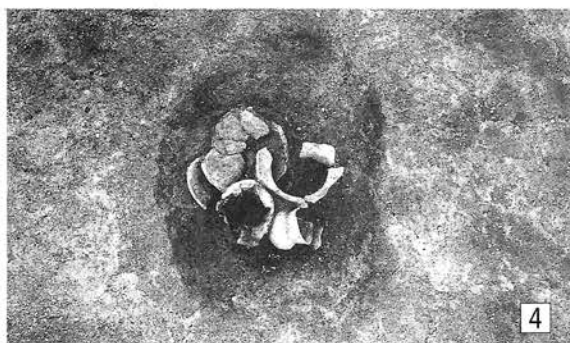
6. SB003住居跡

3. SB014住居跡

4. SB015住居跡

7. SB004住居跡

8. SB005竪穴遺構



1. SB006豎穴遺構 2. SB016豎穴遺構

3. SB003住居跡土器出土狀況 4. 同左

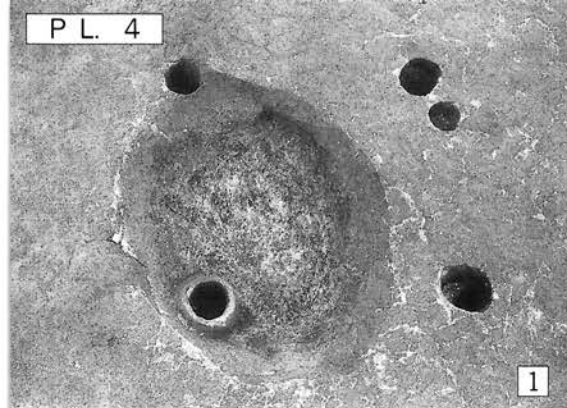
5. SB004住居跡土器出土狀況

6. SB001建物跡

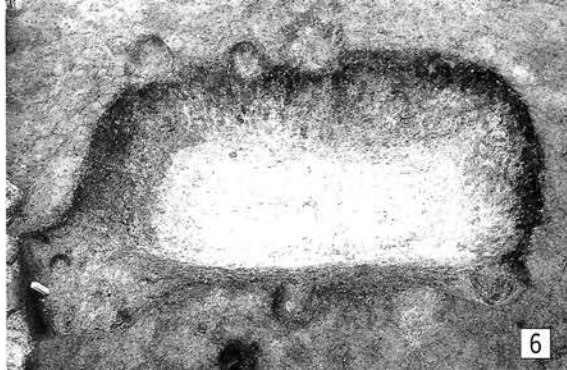
7. SB002・003建物跡

8. SE001井戸

9. SE002井戸



1



6



2



7



3



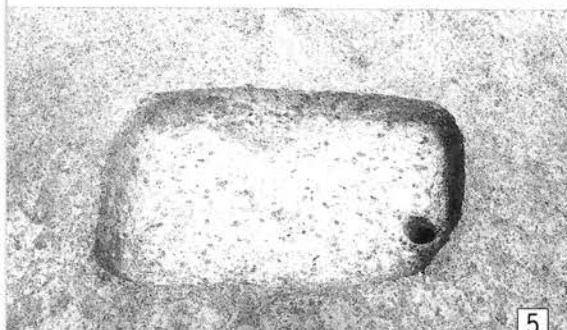
8



4



9

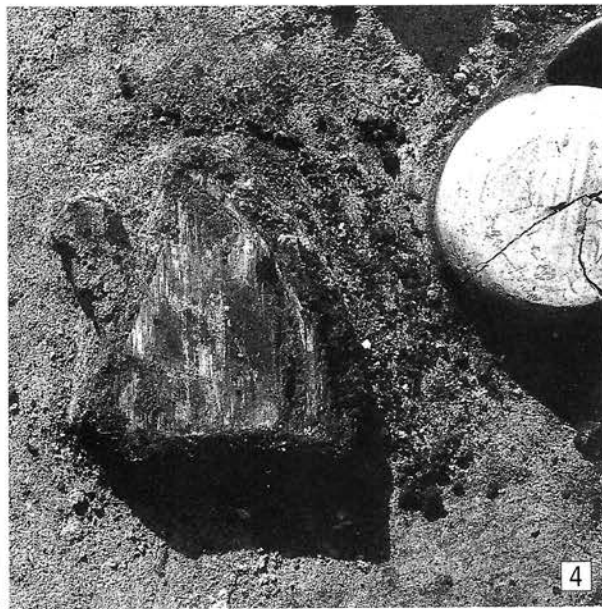
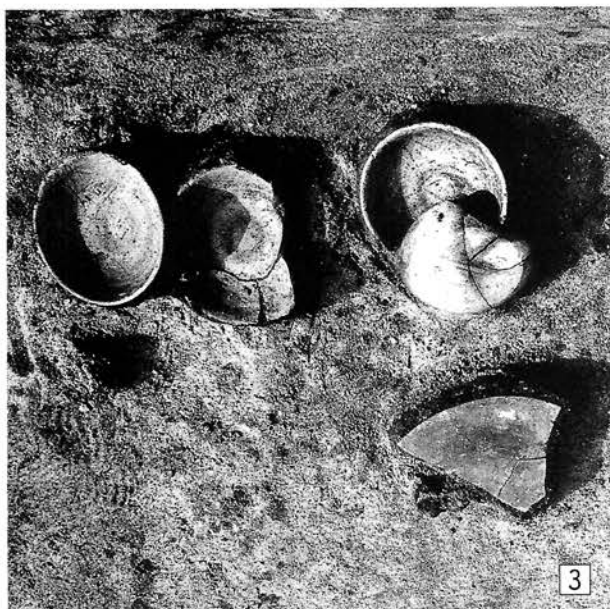


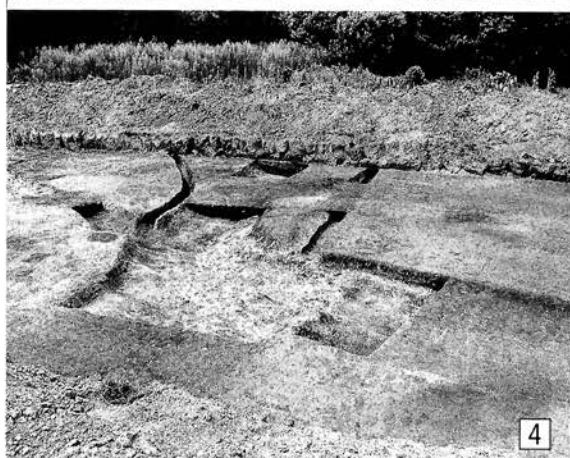
5

- | | |
|----------------|------------|
| 1. SK001土壤 | 6. SK005土壤 |
| 2. SK003土壤 | 7. SK008土壤 |
| 3. SK006土壤 | 8. SK009土壤 |
| 4. SK012・017土壤 | 9. SK011土壤 |
| 5. SK018土壤 | |



1. SP001土壙墓
2. SP001遺物出土状況
3. SP001遺物出土状況
4. 鏡取上げ後





1. B-I区全景
2. B-II区全景
3. B-II区中央部(北から)
4. " (南から)
5. SD001~4溝断面
6. 発掘作業風景



1



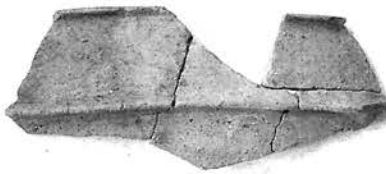
17



2



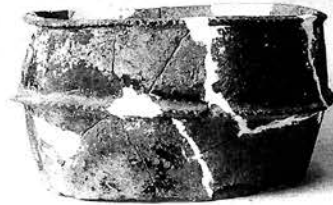
23



4



24



6



25



9



26



14

1. SK006出土 2・4・6・9. SK015出土
14・17・23~26. SB001出土



28, SB001出土 31・33・35, SB003出土
37・39~41・43・45・46, SB004出土



50



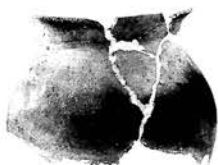
78



58



83



63



88



65



87



68



70



90



92

50. SB004出土 58 • 63. SB005

65 • 68 • 70. SB006出土

78 • 81 • 83 • 88. SK009出土

82 • 87. SD007出土 85. B—II区表土下層出土

90 • 92. SP001出土



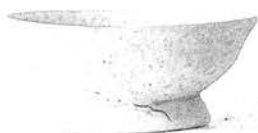
94



95



96



101



103



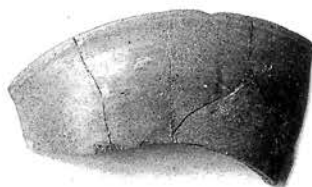
104



105



106



107



110



111

94~111. SP001出土

佐賀市文化財調査報告書第18集

泉 三 本 栗 遺 跡

昭 和 62 年 3 月

発行 佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷 (株) 宮 地 印 刷
佐賀市長瀬町11-20